



梅川
忠兵衛

22
819

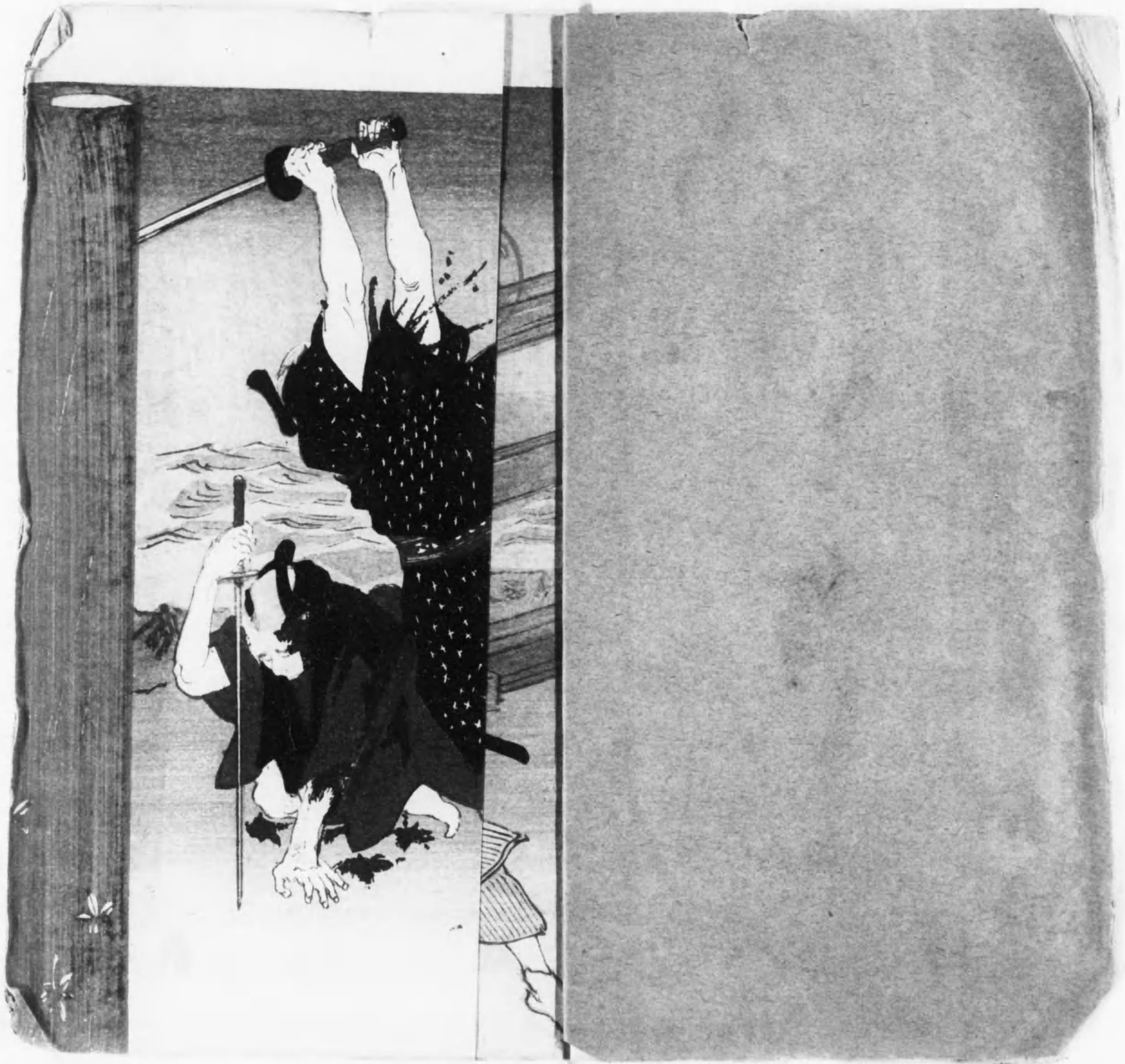
m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



特279

321





梅川忠兵衛

第一席

式亭三馬講演
速記社社員速記

今日よりお好みに應じまして梅川忠兵衛の實録を申し上げますが、
 是は演劇で御覽に入れますのは大分相違致して居ります、
 抑々お話の種と云ふのは今から數年前の事で三馬が大和を廻り
 ました時、圖らず三口村と申す同國五條から一里半餘り離れた
 處を通掛かりました、所が此處に念佛寺と云ふ寺が御座いました
 て、寺内に一男二女の墓がありました、大圓妙經大姉「節山真忠居
 士下に龜屋忠兵衛墓とあり、左は「大圓妙經大姉」同じく下

梅川忠兵衛

新口村にぞ着にけるどありませすが、實地に就て見ると新口村は
はない三口村で、是は何云ふ譯から違つて居りますものか、
夫に當時の作者が大和の事を調べなかつたといふのも御座い
ますまい、して見ると猶且大石内蔵之助、大星由良之助と書
た類でも御座いませうか、兎も角是が種となりまして其後ば
つゝ調べましたので、終に今日より申上げまするやうな顛末も
相分りましたので御座います。
大開秀吉公御盛大の頃大阪堺筋に十二軒の飛脚屋を御差免し
に相成ましたが、後徳川家の御代となつてから之に六軒を増
飛脚屋仲間十八軒となりました、當今では電信もあれば郵便も
ある、第一に銀行と申す重資な商買が出来まして、眞の電信一
通で直現金は送らすとも取引が出来やうといふ便利な事で御座
います、此時代には却々大變なもので、何分金を送りますに

梅川忠兵衛

に本妻お琴墓、また右は「智恵長林信女」妾梅川墓、と刻付て
ありましたから、扱は是が梅川忠兵衛の墓ではなからうかと段々
々取調べて見ました處、全く此節山真忠居士と申すのが大和國
三口村の豪農龜谷久兵衛の次男久次郎と申し、後に大阪堺筋の
飛脚問屋龜屋忠兵衛の養子となりまして、同じく忠兵衛と名乗
りました、乃ち演劇に仕組である戀飛脚大和往來の主人公で御
座います、又本妻のお琴と申しますのは、大坂の豪商鴻池善右
衛門の娘、妾の梅川は忠兵衛と同じく大和國五條下宿の小間物
屋小兵衛の娘お梅と申すので確かに元祿十二年二月二十三日此
念佛寺に於きまして忠兵衛と共に自殺を遂げ、本妻お琴は其後
飯塚筋の龜屋にて死亡せられたのを、遺言によつて此寺に埋
められたものと分りました、茲に刻したのは前にも申しました土地の
名で、御座います、此時代には却々大變なもので、何分金を送りますに

梅川忠兵衛

も紙幣がありませんから五百兩と纏まれば大した重量、従て其
運送の入費も大層なもので御座います、又其金を持って居る爲め
に、途中悪者に殺される者も御座います、御座いません、でそれから
そ飛脚屋に任して了へば、縦合途中で悪者に奪られた所で、それは
飛脚屋の損、此方は無事安体だと云ふので、却々繁昌致したの
で御座います。
茲に大阪堺筋の飛脚屋に龜屋と申す、先十八軒の飛脚屋仲間
相應金満家の間、わがある家があります、當代は此龜屋の一家で
相和園三村の豪農龜谷久兵衛の次男、久次郎と申すのが養子
となりまして、先代死去の後、其名を繼いで忠兵衛と名乗りまし
た、此人は年こそ若う御座います、算筆の道に委しく、基は二
段を打ち、別して刀劍其外茶器骨董の鑑定に掛けては、木職も及
ばぬ位、又劍道は故郷に居た頃、大和郡山の御藩士にて名人の聞

梅川忠兵衛

へ高き、龜井新兵衛義直先生の門に入つて免許を得、腕力
も、男、人、の、應、對、が、柔、和、で、下、々、に、情、深、ひ、と、い、ふ、の、で、近、所、仲、間、の
美、判、も、却、々、宜、し、い、。、大、阪、名、代、の、初、天、神、參、詣、人、の、群、衆、は、一、方、な、ら
座、い、ま、す、此、日、は、大、阪、名、代、の、初、天、神、參、詣、人、の、群、衆、は、一、方、な、ら
ぬ、事、で、龜、屋、忠、兵、衛、も、參、詣、を、し、や、う、と、云、ふ、の、で、若、者、と、小、僧、を、連、れ
て、出、掛、け、ま、し、た、今、華、表、傍、の、處、ま、で、參、り、ま、す、と、十、二、三、人、の、供、
を、連、れ、た、年、の、頃、十、七、八、の、お、嬢、様、文、金、釘、打、の、高、橋、に、大、振、袖、關、
の、句、ひ、優、雅、し、く、其、容、色、の、美、し、い、事、は、實、に、路、行、く、人、の、足、を、
め、唯、も、う、あ、れ、で、も、人、間、か、ど、思、ふ、ば、か、り、遭、遇、ふ、た、忠、兵、衛、は
は、す、万、一、に、顔、合、せ、ま、し、た、が、元、來、女、子、に、は、餘、り、心、の、な、い、仁
了、す、か、ら、鳥、渡、見、た、ば、か、り、で、振、向、き、も、致、し、ま、せ、ん、暫、時、は、其、後、
歸、つ、て、了、た、後、に、頗、は、恍、惚、と、し、て、暫、時、は、其、後、

梅川忠兵衛

ひの疾ひと云ふやうな事でもあらうか、何分御芳託の事ではあり、斯様な事を申しては如何で御座いますか、事に上つたら御意に適つた男でもお在りになりまして、夫が爲めに御氣が少さいから云ふことも云はれず、と云ふ譯かも知れませんが、事ので、斯云ふ有様でお琴は薬を勤めても手にさへ取上げません、日に日に焦悴へて正月二月三月と経過した頃には、糸のやうに瘦せて了つた、鴻池一家の心配は一通りではありませぬ、分て御両親は却て御自分等が病氣にもなりさうな位であります。茲に此鴻池の別家で、店向に同じく鴻池を名乗つて居る善十郎と云ふ人がありまして、過般來江戸の店へ参り留守で御座います。た、一体此人は江戸の事が委しいなか、の自稱通人で、随分放蕩も致した丈けに人の待遇が巧い、ですから本家のお琴も、面白くつて氣が置けないで可いと云ふんで善十郎と大の親密、

七

梅川忠兵衛

を見送つて居りました。

第二席

當代大阪に有名の金満家鴻池山中善右衛門と云ふ人には三人の子が、ありました、中に末子のお琴さんと申すのが、兩親共に大の秘藏で、此お子も亦大の親孝行で御座います、所が元祿七年正月二十五日、初天祥に參詣を致して歸宅してからと云ふものは、三味線を温習つても、歌々として、娘をぬ様子重に、薄暗いやうな處へ、這入つて物を案じてばかり居る、御両親は秘藏見の事ですか、一層懸念で、段々様子を尋ねて見たが別に何とも申しませぬ、其中に三度の食事、進まぬ勝になりまして、胸隔が開て居るで、多分は配を致し、出入りの醫者にも見せたが別には是と云ふ疾病の醫術も付かない、尤も醫者の云ふには、胸隔が開て居るで、多分は

六

梅川忠兵衛

何でも伯父さんく、と云て暮つて居ります、所が歸阪つて聞い
て見ると、留守中か琴は大病で、一家親類大心配だと云ふから
大に驚きまして早速本家へ参り、一通り挨拶が済みますと善
親御本家、此度は飛た御心配で、實に承はつて驚き入りました
本「何も善十郎弱つたよ、何を聞ても泣いて斗り居るんだから
乳母や氣に適の者が傍へ行つて何様云ふ譯だも聞いても少しも
云はないのだから、眞に困る善左様で御座いますか、では私
が一つ様子を探ねて見ませう、本「それは幸ひだ、お前は眞に
も氣に適て居るし、遠慮なく日常から言を云ふ様子だからお前
一つ聞て見てお呉れ、實は醫者の言ふのにも殊に寄たら芳紀の
事だから、彼れを斯と云ふやうな事があるかも知れないどの事
だけれど、何分親の口から斯ふでは無かど聞く譯にも行かず、
先お能く聞て下さい、善成「私もお大心配だとは鑑定を付けて居

梅川忠兵衛

り升世間見事で氣が少さいから斯ふ云ふ事に成ます、本「萬一さ
う云ふ事ならば總領と云ふではなし、常人の氣に人た者なら何
處へでも遣りますよ、世間の親のやうに何處へはやらぬ此處へ
は遣さぬなと云ふやうな事は決してない、表向遣れない處な
ら勘當をして大事ないし何様な貧しい暮しの處でも介はない
都合またそれが役者でも遣します、落語家は却々世才に達した
故二つ返辭で遣ります、是は善十郎は委細承知しましたと云
ふので病室へ参つて見ると、お琴は色蒼白く糸のやうに瘵て居
ります、善お琴や困つたな、大層不快さうだね、琴はい伯父
さんで御座い升か、江戸へ行らつしやいしましたと伺ひました
御返りで御坐いましたか、長く御世話に成ましたが最早私しは
死ぬのを待つて居り升と泣出す善「其様な事を云ふものじや
ない、私も聞て吃驚して仕舞たのさ、こんなじや無かるうと思

つたから来るのが遅く成た、これ女中衆や、私は少々お琴に聞きたい事が在から誰も少時間他へ行つて居てお呉れ」と女中等を次へ下げました。

第三篇

善十郎は語を続けまして、善時にお琴や何んだつて其様に雨親に苦勞を掛けて、物も喰す茶も飲まず聞いでばかり居るんだ、随分年の行ないうちは彼れを新して見たいなと云ふ所から疾らひといふ事も在るが……私は嚴父さんのやうに分らぬ事は云はない、實はお前の嚴父さんは一尙世間見すだ、過般も世間を見ねばいけないと雨云つたら崖根へ上つて諸方を見て、是で見かなと云つて居る、尤も別機に寄ると少しは理屈も云ふし尤もらしい顔をして居るが、おアに世間へ出したら何も分りは

しない、俺はあんな分らなへ人間じゃないから、両親に咄し出来ない事は、私に云つて聞かせなさい、琴は善唯はいいやアわからぬ、年の行かない中と云ふものは詰らない事で病らひなせをして、切話をすれば直ぐに事が纏まる、明日にも病の癒るど云ふ事が幾らもある、嚴父さんや慈母さんへ話しか出来ずとも私に咄す分には構はないで、苦勞を懸けて語も云ふよ、上な善十郎じやない、第一に親に苦勞を懸けて語も云ふいで疾らつて居るのは親不孝だ、云つて出来ぬ事なら仕方がないやうなものだけは何様な事でも大概な事は此伯父さんが致しませるので、お琴も少しは機嫌が復つたやうな塩梅、琴伯父さん能く被仰て下さいました有難う存じます……が私はお蔭かし御座いますので、あの御咄しが……善夫は不可ない差かし

梅川忠兵衛

い事はないしやないか、遠慮なく話さない、琴はいい、善何じ
た、琴左様なら話し致しますが、あの御雨統には秘密で居
下、いまし、善何ども云ふものか、彼様な臍の穴を見たよう
者に話をしたつて詮方がありはしない、決して云ひはしない
琴、其んなら御咄しを致しますが……宜はあの正月の初天神で
御坐います、善、うんうん初天神でせうしたな、琴、参詣に参り
した、善、さう、私は一様に行なかつたが初天神へ行った事は
知して居る、琴、其、華表の傍で御見上げ申た方が善、さア、
其後を云つて聞かせて呉んな、誰が華表の傍で見てた、琴、
い、善、何處の者だ名前が分つて居るか、琴、はいあの何で御座
ます、善、あの何では分らん、善、吉に聞きましたら御座
兵衛と云ふ方だと申しました、善、うひ、お前が其、初天神の
年表の脇で見た人は、御座の飛脚屋、龜屋忠兵衛、うひ、成程忠兵衛

梅川忠兵衛

を亭主にしたいと思ふ處から胸を痛めて居るのか、其様な事な
ら早く私に云へば可いのに、龜屋忠兵衛は私の宅へ毎日来る
か、さへて、琴、龜屋忠兵衛と云ふ方が毎日伯父さんの所へ来る
になりませうか、と顔を赧めて見詰めます、善、来るども、忠兵
衛は私の處へ毎日来て居る彼は元大和三口村の大層な家、
子だが、大阪の一家であの龜屋の養子に來なすつた、まだ女房
もないので種々の話してから相當な者が在つたら女房に世話をし
て貰らひたいと云ふて私に頼むだ事があつた私も、世話を致し
ますと云つて居たくらいさ、年は若いに至つて溫柔い人で、
二段を打つし多癖な人だ、早く咄しをすれば可いに、直に
つて今時は忠兵衛と夫婦に成て子供が三人も出來て居る、
琴、伯父さんまだあれから三月斗りにしかなりませぬ、善、成程

梅川忠兵衛

見て居る中に元氣が付た、女と云ふ者は仕方のないもので其機
な事を心の中に思つて疾しいなぞをするとは……さア、早く
旨い物でも深山食つて身体を丈夫にするが可い、翠はい夫では
今乳母に命つけて、御飯を五つ六つ取に遣します、善、は、は、
何れも一時にそんなに喰なくとも可い、追々喰なよ、段々に力
を付なくては不可ない、早速咄しをして事を極てやらう、と咄
上手の善十郎、善十郎、御本家の氣に、適るやうに致しまして元の座敷へ参
りました、善十郎、御本家の氣に、御待遠様で、漸く萬事分りました
本、何れも善十郎、私はお前には呆れたよお前が世間を見ろと云ふ
たら、私が屋根に上つて是て可かなぞといつ申しました、又、胸の
穴の様で分らないなぞとは、恐入るな、善、御本家をそんな事を御
谷めなすつては困ります、何か娘の心を解て本當の事を云はせ
たいと思ふから、分り口から出任せも云ひます、夫を云はせ

云

梅川忠兵衛

三月、じや子供三人は出来まいが一人位出来て居る時分だ、翠
あ、三月、じや子供三人は出来まいが一人位出来て居る時分だ、翠
も仕込位の事は出来て居る時分だ、先々其で漸く譯が分つた、な
んの差しい事があるものか、爾云ふ半なら何でもありはしない、
見も角も確りしなくつてはいかん、併し今日、翌日と云ふ譯には
いかん五六日の内には、屹度、婚禮の出来るやうにしてやるからの
勿論、此方へ貰らう譯には、往かぬ、爾屋へ嫁に行の、だ可いか、其支
度をしてな、何はしかれ、殿父さんに咄しをする事にしてしよう、
々々相談が、隨つて嫁に行くとした處が、爾云ふ身体では仕方がない
早く物を喰べ、丈夫に成なくつては不可ない、翠、それでは伯父さ
ん、本統に忠兵衛さんの所へ行く事が出来せうか、善、行れるな
んのと云ふて、病氣さへ癒れば直だ、翠、は、伯父さん有難存じま
す、と大喜びで、莞爾しながら髪を手で直す、善、それ見ろ、

云

梅川忠兵衛

聞て居て理屈を云立ては困ります。本先ア、夫れは可いとし
て様子も大略は聞きました。私も心配だから頼の蔭からね、
堀前の龜屋忠兵衛を見染たので、本うひ先代の忠兵衛は二三度
見た事も有が、今の忠兵衛と云ふのは何様な人だか、併し聞て
居ればお前の内へ毎日来て暮を打つそうだから、誠に幸ひの事
で龜屋は全く女房は無のかね。善何様で御座りますか。本夫で
もお前宅へ来るどころではない。女房を欲しいと頼まれたので
はないか。善は、は、夫は頓智で御座ります。漸く是々ど打と
けた時に、夫じや話をして見よと云やうな事を云つて居ては
仕方ありません。直に安心をするように三月で子供の三人も
出来るなど戯言半分間に合せを云つたので、本なに間に合せ
本統にお前のようならやらッばこを云ふ者はないせ、は、
善そんな事をまつしやるが忠兵衛に女房が有るとでも云つた

梅川忠兵

日にはお琴は死んで仕舞ますせ、幸ひ女房が無から直に咄を
めて遣ると云へば身体が癒る、病氣さへ癒ればさうでもなりま
す、併し何んで御座ります。私にした處で萬更當のないことを云
つた譯でも御座りません。宅へ出入をする心齋橋の茶道具屋で
梅屋平助、彼の男は能登屋へ行くと云ふ事を聞いて居りますから、
梅屋を呼ぶせて委細の様子を探つて見ませう。本それでは何分
お前に任せるから、宜しくお頼み申す。善よろしう御座います。
ど其儘立歸つた鴻池善十郎。早速買て出入を致して居ります骨董
屋平助を呼に遣ました。

第四席

心齋橋の骨董屋梅屋平助は豫てお出入の鴻池の向店から使
が見ゆましたから、早速出て参りまして一室へ通つて見と、
五

衛兵忠川

善うひ 平茶が出来ますと菓子の出る物に極つて居ります
成程 平人が来れば茶を出します、直に菓子の出る物で
さいな、何かまだ……これくまだ茶菓子に此處へ出ぬ、早く
持てこい、平、是は相濟ません御催促を申たようだ、善催促をし
て居るのしやないか、平へ、それで且那様一寸一口戴さます方
で御座いますから沙氣のある上等の餅菓子など……善これく
進るよ、其れから何した、平へ、有給ふ、善、禮は跡で云へ、
内、平、其日は夫へ出たのが金米糖で私わ且那が對方を向ひて居る
る、且、那は此方き向いて平助と云はれました、善、酷い男だ、平、す
貴様が、且、那は此方き向いて平助と云はれました、善、酷い男だ、平、す
目、に六十粒と申ましたら否、と且、那は算盤で勘定をして三
十二粒しかかないと被仰つたから廣げて勘定して見ると一粒も

衛兵忠川梅

ひません、開平から割出した金米糖だと云はれました、善、あは、
レ、ア、見ると餘程多量の、人だ、手跡よし、算盤もよし、洒落もよし、威心
だ、算筆も可い、平、其れです、から、朔日十五日廿八日と云ふ譯でも
御座います、まい、善、分らね、人だ、算盤は盤算、筆は手だ、平へ、い
く、猶、且、皮癖の事で御座いますか、手を揉みますと可い心持で
善、これく、其んな事と違う、いや、さ、女房御家内はあるか、無い
か、平へ、い、私、も、御出入を致して居ります、故、御相當のお方が在
つたらと存じて探して居ります、本家の娘だ、人の云ちや不可んせ
せん、善、附か、實は、の、平助、本家の娘だ、人の云ちや不可んせ
事、が、極、れば、可い、が、其、屋、忠、兵衛、に、戀、疾、ら、ひ、を、して、居、る、の、だ、て
平、へ、い、御、本、家の、嬢、様、が、何、の、御、方、で、善、三、番、目、の、お、琴、と、云、ふ、の
内、だ、平、あ、い、三、番、目、の、嬢、様、で、す、か、剛、いな、善、其、事、に、付、て、御、前、に
内、々、話、して、橋、渡、し、を、して、貰、ひ、たい、と思、ふ、が、首、尾、能、く、行、け、ば、十

梅川忠兵衛

善これこれ平助、
 い人だ、今話す通り本家の娘が此間から戀疾らひをして居る
 位だからな、何分宜しく頼む、併し此縁談は極るだろかな
 方、一は龜屋忠兵衛さんで御座います、此方は鴻池の娘子さん、先
 な、爾行けば何よりだが、併し財産は幾何位か有かな、話しが
 ると却て笑草だからな、幾何位な身代だね、餘り飛違つた事をす
 す、先二萬兩餘も御座りませうか、善お、大層なりのだ、平而
 して御實家は、大和五條三ノ口村の龜谷久兵衛といふ豪家で、十
 萬兩くらゐの身代に、地方も十萬石くらゐは有ると云ふ事で、善
 ふうむ、平夫て若旦那が男が美くつて、利口で其上慈善家だとい
 んです、耐りません、御本家の娘さんも可くお惚れなさい

梅川忠兵衛

分に、観をする、平有り難ふ存じます、畏まりました、少々御手附
 は如何、善これ、なんぼ道具屋でも爾慾張な、平へい、是は龜
 組で御免下さいまし、何しろ此方は鴻池のお娘さん、彼方は氣前
 の宜い龜屋の旦那、因で出来れば有卦入の三年目か善これ、
 其様な事は何でも可い、忠兵衛と云ふ人は何か道楽が有るか
 本、平道楽なせは少しも御座いません、御酒を飲むと云ふた處が
 は、御座いせん、下戸も同じ事で、善氣が荒いか、平荒いと云ふので
 様、御座いせん、平常誠に温順の人で、併し劍術は大和郡山本多
 御習ひなすつて、免許皆傳の技量が有りました、龜井新兵衛先生に從て
 善、ふうむ、平夫れからと、併し嘘を吐ては不可んせ、善何
 其んなに考へて賞なくても可い、併し嘘を吐ては不可んせ、善何
 なか、嘘こでは御座いません、と平助は矢鱈に賞まする

第五席

ました、それで私も金儲けが……いや御橋渡しとは實に難有く
つてたまりません善先何より早速話をしておくれ、首尾能
く行けば本家から澤山御禮をさせる平へい、承知致しまし
た、と平助は喜んで、向店を出て横飛に、心算橋の宅に歸りま
した。

縁談の橋渡しを頼まれた鶴屋平助莞爾もので歸宅つて来る
と那添ふ女房は早くも何か好い事があるを見て取つたから女
お前さん何なすつた平喜んで呉れ實は斯だ、向店の旦那様か
らお迎ひが来たので何御用かと思つて行つた處が旦那様の云はつ
しやるは、鶴屋の池の縁さんで一番御容貌の美しいお琴様と云ふの
が、鶴屋さんへどうか縁に行きたいと云ひなされる、忠兵衛さん

もあの通りの氣性たで一讀はあるまいと思ふ、女夫はまア附い
金儲が出来ました、平出来たの出来ないので云つて、イヤ鳥渡
行て唯をしてこやう、女お前さん、餘り餘計な事をお云ひなさ
んな、餘り饒舌と却て物の纏らないものですから、平大丈夫、
何も云やアしないよ、袴を出して呉んな、紋附く、斯いふ日に
は紋附に限る、と最早中に這入た氣になつて自宅を飛出した
平助は、堺筋の鶴屋に参りますと幸ひ忠兵衛も徒然と見へ本を
讀んで居る處で御座いました、平へは今日、忠兵衛も平助か、さ
ア此方へお來で、今丁度茶を入れやうと云ふ處だ、平、今日はお
茶はお断り申します、忠、何だ、お茶は飲みなさらんか、平、先御目出
度、御座います、忠、何だ、お茶は飲みなさらんか、平、先御目出
且、那、私の骨折と云ふものは一通りでは御座いませぬ、且、那、様
に餘程能く思ふて戴かなければ成せせん、日常御出入を致しま

梅川忠兵衛

梅川忠兵衛

御恩返しだと思つて、剛い骨を折ました外では御座いませぬが、
 且、御座いますから、誰ぞ似合ひのお方を遣うから心掛て居り
 ましたか、恰度大阪一等の金持の御娘のお琴様と云ふ
 のを何處にかやらふと云ふ話、私しは此處だと思ひまして段々
 々々咄しを致した處が、先方様では、御腹を立てはいけ
 ません、今少々、其處を私しが能
 く先ア饒舌つてな、何卒先ア此方へ御連れ申したい、御縁組を
 した、いと思ひまして、もういろく、な事を云ふて漸く、御縁組を
 は、平助の云ふ方に嫁を嫁らうかと、池の且、那様が、いふて下す
 つて、向店の善十郎様も平助か、爾云ふものなら、御屋へ嫁子をお
 遣はしなさいと云ふので、共々に骨を折つて下さる事に、なりませぬ
 御座います、且、別様に御喜びで、御容貌は美

し、御年は若し、何にせへ、鴻の池の娘さん、揃ふた、云ふて、
 上は、御座いませぬ、忠平助少し待な、夫は折角だ、が止しませ
 家内にする事について、骨を折つて呉た、夫は折角だ、が止しませ
 う、平へ、ね、忠、夫は止しませうよ、平よ、止すて、且、那、
 是、だ、け、の、縁、談、を、...、忠、釣、合、ぬ、が、不、縁、の、元、と、云、つ、て、同、じ、身、上、と
 云、ふ、の、も、可、笑、しい、が、相、當、の、處、か、ら、賞、は、な、い、と、何、か、に、就、つ、て、
 云、な、い、鴻、の、池、と、い、ふ、た、ら、大、阪、隨、一、の、金、満、家、で、其、娘、を、貰、た、
 云、へ、ば、さ、ア、龜、屋、忠、兵、衛、は、鴻、の、池、の、娘、の、お、影、で、大、分、身、上、が、出、來、
 た、彼、は、鴻、の、池、の、後、ろ、見、だ、と、云、は、れ、て、は、此、先、何、か、し、た、時、に、何、の
 役、に、立、た、な、い、妻、は、目、下、より、貰、へ、と、云、ふ、警、言、が、あ、る、か、ら、折、角、活
 が、此、咄、し、は、止、そ、ふ、よ、平、へ、ね、と、云、ふ、様、で、御、座、い、ま、す、か、
 所、實、は、鴻、の、池、の、娘、さん、が、初、天、神、の、時、に、天、滿、天、神、の、社、内、で、
 所、を、見、て、夫、から、懸、疾、ら、い、を、し、て、...、忠、こ、れ、平、助、馬、鹿、も、休、み

三

梅川忠兵衛

云つて来たました 忠夫が悪い、嘘と云ふものは後に露顯をした
時に馬鹿にされる、其様な嘘を吐かないで本當の事を云へ 平本
當の事をいふたらどうかと思ひまして其鳥渡おべんちやらを云
ひましたので、先ア旦那様其様に腹をお立てなさらないで、
ね、可く考へて御覽遊ばせ、決して不可い御縁談じや御座い
ません、何しろ先方は鴻の池さん、此方は飛脚問屋の龜屋忠兵
衛さん、云は、身分違ひの…… 忠これ、身分違ひと云はれては
身分違ひだ、外の事は開流しにもするが身分違ひと云はるが、
忠兵衛は駄つて居られぬこれ平助 平へ、思元來飛脚問屋を
何と思ふ儘の荷物や金子の扱ひこそするが、此十八軒の飛脚屋
と云ふものは…… 別して私の家を初め舊家と云はれる十二軒は
抑々太閤様御時代に世間融通の爲めに御免になつた、云は、無
く適はぬ商賈なのだ、それ鴻池は何だ、大阪第一の資産家

元

梅川忠兵衛

云へ、此忠兵衛を初天神の時に鴻の池の娘が見て戀疾らひ
だ、夫は外へ行つて咄しをしる私には年は行かんが其んな事は嫌ら
いだ、又往來で見た者に聊でも懸想をするやうな其んな不品行
な娘を女房にすれば、此先又氣に適た者が在れば其者へ心を移
す、爾いふ者を女房にするなどは…… 先々平助、何も云はず
に茶でも飲んで歸いなさい 平先ア、サウ實所のやうに彼
仰つたら、私が新袴を穿て来た甲斐が御座いません 忠礼を
て来たつて私には別に頼はしない 平否、何卒先ア左様に被仰ら
いで聞て下さいまし、實は其是には段々…… 忠何が段々だ
平へ、實は斯うなので、向店の旦那が被仰るには何卒一つ
めたいどの事で、私のもぞうぞ此縁談を旨く極めたいと思ひまし
て、且那の御身上は何のくらしと尋ねられましたで、先ア二萬
圓からの御身代、御實家は十萬石からの地方があると思ひ事と

元

梅川忠兵衛

手へい人間が馬鹿で慈悲善根と云ふものが無く、
はヤ人間の風上にも置かれせん善これく先程の咄しとは
大變に違ふな、慈善家て利口で諸葛に達して居ると云ふたでは
ないか平イエ、利口處か馬鹿の抜作で懲らして居る様はな
い奴です、善身代は二萬兩位と云ふじやないか平其様な事は
御座りませせん、表は飾つて居ますが段々裡面を探つて見ますと
漸く其日暮しで御座います、最早米でも小買で、家内の者は粥
斗り咽て居ると云ふ貧しい家で御坐います、善實家は大層金持
ではないか平い、何それ水呑百姓ださうで、善これどうし
たのだい、先刻の咄しとは平助圓で違ふではないか、あは、
呼でもして来たな平、喧嘩も致しません、此方へお入でになると云
ふことば剛い事だと思ひましたから、私に其通り申しました

梅川忠兵衛

ついで口が滑つて先方が鴻の池の娘さんちや三途飛脚の間屋とは
身分違ひ、當家へ娘を下さると云ふのは鴻池さんの思召の深い
所と斯う申しますと、怒つたの怒らんのと云ふて、身分違ひと
は何だ、飛脚屋と云ふものは大間様の時代に十二軒許されたな
どと能書と並べて、其揚句に私の處へ出入りはならん、以來家
へ来ると水を打掛るの叩き出すのと、私を大同様な取扱ひで御
座いました、善夫はお前が悪い、能くない事を云つた何も其様
な事を云へとは頼まん、鴻の池の娘を貰ふて下さるか下さらん
か、龜屋忠兵衛さんの心を聞にやつたのだ、謂は、橋渡した、
介と橋渡とは違ふ全体貴様が饒舌家だから不可ん、態々行て
して来たんだ、身分違ひとは何だ、龜屋忠兵衛さんは殊更評判の
可い御方だ、貴様に斗り任せて置けないから實は近所の様子を
今探らした所か、堺筋で龜屋忠兵衛さんは剛い者だ、ア、レは年

梅川忠兵衛

は若いがあゝの位な人はない、實に感心しやと来る者もく、皆んな其事を云ふて何様に賞めて居るか知れやしない、貴様が折角に縁談を壊して来たんだ、何も云ふ處はない、貴様のよふな者を橋渡にやつたのは此善十郎の目違ひだ、出て行け、以來出入はならんぞ、速々と行ないか、平助も仕方無から消打掛るぞ、馬鹿野郎、平是は失策つた、平助も仕方が無から消然として心齋橋の家へ歸ると女房はいそ／＼喜んで、女、お歸りかへ、旨く歸りましたか、宜掬梅に往きましたか、平夫か剛ひ手違ひで女へはお貰ひなさるのですか、平、貰ふも貰はないも鳥渡口の滑つて、龜屋さんの事を身分違ひだといふたが剛い版立で、結局龜屋さんも出入が止つた、女、お前さんの様な世の中、馬鹿な人はありません、道具でも何んでも知れ無いらぬ、お筋の且那の處へ行て見て貰ふつたり聞て覺わたり何より

梅川忠兵衛

大事の且那樣、其家へ行て身分違ひなんぞと云ふ事かありませか、其上出入を止められ……詮様がないうやないか、何様かしてお説をしなければなりませんよ、龜屋さんに出入しなないと道具やは出来はしない、向店の且那にでも御説を願つたらいでせう、平、向店の且那の方も出入止だ、少々私の言過た事があるつたので、向店の且那樣も腹を立て貴様見たやうな者は鴻の池一家へは足踏させんと此様云はれて結局逐出されて来た、女、まア本統に呆れたね、一軒や二軒ヒヤアない鴻池一家十二軒ヒヤないか、それで此身代が出来て居るのに出入を止められるなんて本統に、何だッてお前さんのやうな人をなんで亭主に持たんだら、私は家附の娘、お前さんは店の奉公人だつたのを直したんだから、お前さんはお前さんの荷物を持って離縁状を置て出てい

三

了はなけりやならない。平なに出て行けど、女一日も置く事は出来ませんよ。早く出て行て下さい。と大層な慥幕なので、平助は弱つて居る處へ二階から八つ斗りの子が下りて来て、「お父さん、お前のような人が居ると、御呉れ、と平助は大きければ水を打掛るよ。平何だ生意氣な子供、御呉れ、と平助は大き弱りで二階へ上つて寝て了う。

第七席

話替つて向店の善十郎は段々考へたが、是は人を持ってしては不可ない。と自身龜屋へ出向き、忠兵衛に面會をして段々、咄しを致すと、忠兵衛も漸く得心して結婚の咄しに相成ります。切替は縁は早いもので、鴻の池の方でも大きに喜こび、龜屋忠兵衛も承知の上は一日も早くと云ふ事に成りました。付ては折角に口入

れをした者だから平助も出入をさせて當日は、おさうと云ふ事になり、茲に元禄七年四月六日が婚禮と云ふ事に定まりました。龜屋の方支度を致し、鴻の池の方は、お琴の喜び一通りでは御坐りません。十分支度を致し、お琴の喜び一通りでは御坐りました。丁度其日の八つ時頃、龜屋の召使岡藏と云ふ者當年四十餘り、至つて氣性の面白い男で、用達の透を見て、風呂へ参りました。た、此頃は、大坂風呂は戸棚風呂で御座いまして、岡藏中に這入て洗つて居ります。暗いから誰か這入て来たか、又這入て居るかは分り湯風呂の中は暗いから誰か這入て来たか、又這入て居るかは分りませぬ。○おい今夜は大變だ。△うむ今夜は大變だ。□鴻の池の方の水浴せを濟せると、堀筋の龜屋の方へ行んだ。○親分が怒つて居るせ昨日にも何と云つて来れば可んだが、何とも云つて来ねへから此様な事になるのだ。△龜屋忠兵衛と云ふ奴も

梅川忠兵衛

ふかどした厭アな奴 △カム彼奴が何した
事になれば忠兵衛には構はず、岡蔵の脇腹を刺つて了はね
しや氣が済ねへ、傍に聞いて居た岡蔵は驚いた ○は、おい、
それつてはが斯うなんだ恰度二十日計り前だ、彼處の前を通ると
水を撒て居やがつたが、俺の足へ水を打掛て置きやがつて
氣を附て歩行けと云やアがつたから、餘まり癪に障つて堪らね
へだから頭を一つ…… △やつたか ○やろうとするを岡蔵の
野郎は素早いせ、飯焚のやうでね △おや、手前打擲られ
たのか ○實は先ア其様なものよ、其意趣返しを今夜しなけれ
ばならねへんだ △さア、くすくす、此様な吐をして居ね
ばならねへんだ △さア、くすくす、此様な吐をして居ね
あア彼は梅ヶ辻の山田屋喜藏の若者だなど心付いたから早々風
呂から出て、急いで歸て來ました。此水浴せ祝と申しませすのは、

元

梅川忠兵衛

イケ弄戲やがつて、大和くんたりから養子に來て大坂の風を
らないか知つてるか、夫は分らないが、幾らも人間が付いて居
から疾に頼みに來なくつちやアならね、忠兵衛の野郎の腕の一本
も打折つてやろうと云つてたせ、面白くも出たな、
△出た出た出た久しくねな水浴せは、
ない處を見るど、龜屋忠兵衛自分で扱扱でも仕様と思つて居る
んじやね、か ○雨よ、鴻の池の方は二百兩持つて來て當日は
御頼み申しますと云つて來たが、流石は鴻池だ百兩だと思つて
居る處へ二百兩、龜屋の方でも百兩や五十兩は持つて來るだろ
うと斯う云つてたのだ △夫を今迄何とも云はねへなア
うせやろうせ △や、夫を今迄何とも云はねへなア
△俺は又龜屋の家、岡蔵と云ふ飯焚が居るだらう、
眼のさよ

三

節句の際にも水祝と云ふ事が在りますが、唯今は絶て御坐いませぬ、嫁取の際にも水祝と云ふ事が在りますが、唯今は絶て御坐いませぬ、

が御挨拶を致しまして、何卒御一同御手を拜借と因で平打を致し、其顔役にて對して水を浴せる者は御座りませぬ、

第八席

風呂の中で委細の様子を聞いた岡蔵は早速立歸りまして忠兵衛の

梅川忠兵衛

様子を見ますと、今晩嫁の来るのに別段髪も結はず服装も改り
せん、今日は支度も無き様子にしては下可んせ、何か秘密の咄しか
上げますか、鳥渡此方へ御出なすつて……
い、何だへ、剛い事を聞きませした、御断は出来ません、梅川
は、山田の喜藏の若者が三四人居ましての咄しでは、今夜の
辻入の附て水祝ひ水浴せをするに二百兩持して山田の喜藏を頼
の池さんの方、最早二日程前に二百里持して山田の喜藏を頼
さん、さうで、喜藏が乗込んで挨拶をするから水一滴も嫁に掛け
なせ、いさうで、喜藏が乗込んで挨拶をするから水一滴も嫁に掛け
非なら、か、今、夜、は、打、折、る、な、ど、若、者、が、私、の、遣、入、て、居、る、の、を、

梅川忠兵衛

知りませぬ、家の見えて、相談して居りました、忠なりに、多勢が
来て、私、の、家、を、見、て、相、談、し、て、居、り、ま、し、た、の、腕、を、折、ら、れ、よ、う、水
も、裕、に、何、卒、金、を、持、て、山、田、の、喜、藏、の、處、へ、行、つ、て、止、め、や、う、何、卒、つ
て、何、卒、金、を、持、て、山、田、の、喜、藏、の、處、へ、行、つ、て、止、め、や、う、何、卒、つ
挨拶、も、三、日、も、下、さい、と、頼、んで、ね、の、喜、藏、の、處、へ、行、つ、て、止、め、や、う、何、卒、つ
が、成、て、喜、藏、を、頼、む、泉、州、の、四、郎、藏、さん、を、頼、み、に、行、ら、つ、し、や、い、ま
に、成、て、喜、藏、を、頼、む、泉、州、の、四、郎、藏、さん、を、頼、み、に、行、ら、つ、し、や、い、ま
是、か、ら、通、し、駕、で、泉、州、の、四、郎、藏、さん、を、頼、み、に、行、ら、つ、し、や、い、ま
し、忠、夫、も、聞、て、居、る、堺、の、四、郎、藏、さん、を、頼、み、に、行、ら、つ、し、や、い、ま
と、承、知、し、て、呉、れ、ま、す、可、い、が、断、り、も、宜、い、顔、役、だ、と、評、判、だ、が、是
心、配、を、承、知、し、て、呉、れ、ま、す、可、い、が、断、り、も、宜、い、顔、役、だ、と、評、判、だ、が、是
大、願、動、が、出、來、ま、す、せ、第、一、且、那、様、の、御、命、が、危、険、い、此、家、も、何、様、な

梅川忠兵衛

が其今夜の換機を... 此木太刀が忠實はのお前だから咄すが... 大和郡山の龜井新兵衛

梅川忠兵衛

るか知れやしません 忠今更詮方がないではないか成たら成た... 四

梅川忠兵衛

備前岡山山在ですが、餘り喧嘩をするので村にも居られませぬ位
様々斯う見えても唯の岡蔵では御座いませぬ、生れませぬのは
先方大勢です、申すので、忠貴様何かいませぬ、國且那
岡蔵が一生懸命に乘氣になるので、忠兵衛は思はず笑ながら
岡蔵が一生懸命に乘氣になるので、忠兵衛は思はず笑ながら
岡蔵が一生懸命に乘氣になるので、忠兵衛は思はず笑ながら

第九席

イヤモロ實に恐入つたもので、宜しうがす、私しが片棒擔ぎま
用を相談相手に成させん、其様な奴は片端から打擲て扱其上で入
は又右衛門さんが可いのなぞと氣を揉むような其様なお了簡で
の又右衛門さんが可いのなぞと氣を揉むような其様なお了簡で
の又右衛門さんが可いのなぞと氣を揉むような其様なお了簡で

梅川忠兵衛

誰か一部始終を聞いて見れば大變だ、早く駕輿を拵へる、堀へ行て
誰か一部始終を聞いて見れば大變だ、早く駕輿を拵へる、堀へ行て
誰か一部始終を聞いて見れば大變だ、早く駕輿を拵へる、堀へ行て
誰か一部始終を聞いて見れば大變だ、早く駕輿を拵へる、堀へ行て
誰か一部始終を聞いて見れば大變だ、早く駕輿を拵へる、堀へ行て

哭

梅川忠兵衛

ぬなの何事も此岡蔵が承知致しませぬから御心配なさらんで
忠は面白くも何する貴様は岡ナ逆も其木太刀を持って飛出
した處か其様な大勢一退にふつ叩くといふ譯には行きませ
いから大釜に二杯程湯を沸して置きまして忠ふらむ懸て遣
大勢来やがつて打合が初つたらせしく頭からぶつ懸て遣
の下の刺股が二本御座いますからあれをいれといて真赤に焼
山田喜蔵の若い奴等が来たら喉へ引掛て押ます且那をろく
湯を沸かしませう」恰で虫同様の取扱で御座います夕方に成
世間が大騒ぎ今夜鴻の池の娘が懸屋忠兵衛の處へ嫁に來
云ふから、定めて立派だるうと名々待て居る、其内に鴻の池
方では夕方に成ると家の前には百目掛の幟を二十挺も点して
敷いてありませす、其上にはお琴は細帽子を冠つて立派な立身

梅川忠兵衛

しそりに坐はつて居りますから見たくも顔は見せません、此方
の所には兩親を初め親類一同名々立派に刃立て並んで居りませ
横手の處に新らしい番手桶に五十杯程の水を汲んで積上げてありませ
すし、又此方には敷物を敷いて梅ヶ辻の山田喜蔵、年頃四十二三
羽織袴で携へて居ります、小長刀を脇に引附けて天地金の扇を
持て密へて居る傍で見ると流石鴻の池で三四十兩の錢が二百文
宛水引で結びたのか積んである、恰度燈火の点き頃になる追
々出て参りませしたの三郷の貧乏人中には山田喜蔵の若い者で
無頼漢も加はつて居ります「嫁さん婿さん祝はうなソレ嫁さ
ん婿さん祝はうな」山田の喜蔵は聲を裏上げて「是はく御
一御祝ひませす、山田の喜蔵は聲を裏上げて「是はく御
一同御祝ひませす、御挨拶を致しませす、御一同の御手を拜借致しませ

梅川忠兵衛

す手打を成すつて御引取を願ひます
切口上で述べます大勢の
者は山田の親分様の御挨拶だ
何彼ないわい山田の親分さ
んの御挨拶とやそれ手を打て
いふので一同に手を揃へて
いやんく祝して三度しやんし
やんしやんしやん御目出度う
に祝ひます喜是は聊か御座
御座います御祝儀で御座いま
す
御持販りを願ひます
と一人り二人りでは
ない故に錢をそれへ
持出し一同の者へ渡して遣
りませす一同は賞つて
「剛いなア
山田の親分さん挨拶は速やか
なもんだ「サア
是から堺筋の
田の親分さん挨拶は速やか
なもんだ「サア
是から堺筋の
龜屋兵衛さん挨拶は速やか
なもんだ「サア
是から堺筋の
方へ参ります山田の喜蔵も
上立た子分を連れて大勢の中
に混つ

梅川忠兵衛

燈火だけは山点て居ります
近所の者も黙た「何だへ
れん」と各々戸を閉て人が家
へ遣入らんやうにして居
ます
へわアく押掛けて来た貧乏
人皆々此様子を見てそれ御
ひ申せく「嫁さん祝いませ
う」と既に水を浴せやうと
します忠暫く何卒御控へ下
さいませうと御屋忠兵衛は
御引取を願ひます「喧まし
御一同御手を拜借御祝下
さいませうと御引取を願ひ
ます
いやい何だと龜屋忠兵衛が
挨拶に出たへん大和の五條
たりから婿養子に來て大坂
の事も知らねのか大坂では
婿取り
婿取りの時歴史と然し
た顔役の親分の挨拶をする
といふ事があるか祝ひ
て居るだろ、我が一人
で挨拶をするといふ事がある
か
に來たのだ、暴れに來た
のではなないぞ、忠皆さん
私しは別段に水

を浴せてお貰ひ申す覺ゆるも御座いません、御祝ひ下さると云ふ
から忠兵衛是へ出て居ります、畢當人が挨拶が出来ないと云ふ
人を頼むのでは御座いませんか、能屋忠兵衛自身に挨拶をした
ら宜敷御座りませぬと云ふ處へ、殿の影から岡蔵か眞赤に
けて刺又を擔いで面を出した。

第十席

眞紅に焼けた刺又を擔いで面を出して岡蔵は岡且那條々遣付
けませうか「ヤア」岡蔵が面を出しやがつた、忠兵衛の挨拶
で皆御歸り下さい、若し歸る事が出来れば御存分に成さ
い「か」存分にしろと、汝が云ふ迄もねねにしてお存分に成
に「か」存分にしろと、汝が云ふ迄もねねにしてお存分に成
分する氣で来たのだ、これ大阪は剛い親分にして遣る存分
あ、分る氣で来たのだ、これ大阪は剛い親分にして遣る存分

叩き渡せ「遣付ろく」無頼漢が来て居るから堪りませぬ、既に
忠兵衛の家へ乗込、持の股立を取て羽織の早業、拾れば白き禪に忽ち白
後へ飛さがり、持の股立を取て羽織の早業、拾れば白き禪に忽ち白
鉢巻をして木太刀を取上げた、稱代の早業、拾れば白き禪に忽ち白
は此木太刀の者は遣付ちまへと身構へする、乗込で来た山田
蔵の子分の者は遣付ちまへと身構へする、乗込で来た山田
心得たりと大勢の間へ、体を入て右に當り左に當り、其技量、流石
は龜井新兵衛先生の高弟、一人の柄子で、湯を汲んで、乗込で
いません、跡からは岡蔵が長い柄子で、湯を汲んで、乗込で
る奴の頭からサアは、浴せて居る、忠兵衛は湯が無くなる
へ廻り、打倒し、投し、浴せて居る、忠兵衛は湯が無くなる
刺又の焼けたのを持出して、居る、忠兵衛は湯が無くなる
振廻す、二人の働きに恐れ、皆々来い、片端から首を焼切せ、

梅川忠兵衛

行ます 喜やい何んだつて縛りやがるんで、縛られて恐入ま
したと云ふやうな喜藏じやねいぞ、殺せ、鶴屋忠兵衛殺して呉
れ、山田の喜藏を縛つて恥を掻かせるより一と思に殺して呉れ
様、貴方は剛い者で、皆んな逃げてたか、私もお大釜に二杯
沸した湯を打掛けて遣りましたから大方焼傷をしやしたる忠
其住の處へ此野郎を縛つて置け、岡へは長ましました、岡藏は
山田喜藏を縛つたまゝ引立て住に縛付けました、縛られて居る
喜藏は幾ら地團太を踏んでも詮方がない、唯眼を瞑らして二人
を睨むばかりです、忠兵衛は近邊の家へ自身参りました、今夜
は御願がせ申して真に御氣の毒様な事を致しました、岡藏に
灯を持せて廻りまして、結句行届いた事と評判が能く、頼
て立歸つて喜藏の縄を解つて一問に連れ参りました、段々と意見を

三

梅川忠兵衛

乗込で来た山田の喜藏、長脇差を抜いて喜さア来い忠兵衛、山
田の喜藏が祝ふて遣る、と井土真海の長脇差真向に振舞し、飛
出し、喜野郎喜藏が相手に成るさア来い、鶴屋忠兵衛是が喜藏
と云ふ奴か、此奴を押さへすれば最早宜敷いと思ひましたから
自分も木太刀を以て進寄り真向より斬下して来る處が木太刀の
事で、すから受けては堪りません、先方は真劍で御座ります、休
を交して喜藏の利腕を鈍に打ましたから、喜藏はあつと云ふて
一刀を夫へ取落した、南無三と踏んた足を取って肩へ引掛け、
組付いて来るのを、忠兵衛得たりと小手を取って肩へ引掛け、
一足進んで巖石落して三間斗り向ふへ投付けて置て、起上らんと
喜藏の上飛掛り忽ちの腕を後ろへ捻上げて、岡藏は
喜藏の早速細引を持て来て山田の喜藏をぐるく、巻に縛り上
て了つた、親分が縛られた様子を見た子分等は驚いて皆逃げて

たし 忠凡 俠客と云ふ者は弱い者を扶け強い者を挫くと云ふのが本意であるのに、貴様は是だけの腕前がありながら、悪者の顔と成て縁取取りに金銀を奪ふやうな事を致し弱いの者を苛めると云ふ事があるか、甚だ宜敷くない、ア敗心を致し弱いの者を苛め客心を起して人の中の人と云はれるやうに成か、それとも猶且改めなければ今一度真剣の勝負をしる、幸ひ敗心をすれば此忠兵衛が絶力と成て本統の男に成れるやうにして還る、さア二つに一つの返事だ可く考へて見ろ」と詰寄る、山田の喜藏は根が馬鹿でない人故、喜藏に恐入をしまして御座います、是から敗心を致し御意見に従ひ屹度心を入替へて賊の俠客と云はれたう御座ります、又且那の様な御方に力に成て御賞ひ申せば何よりでいと眞實を面に現はして詫入りましたので、忠兵衛も大いに

第十一席

喜び、飛脚問屋は多くの人足を使ひます故、改めて喜藏を人足廻しの頭とする事に致しませした諺言に云ふ通り悪に強きものは善にもで、是から喜藏は眞實に働きます。

却説 婿禮は中一日置て送なく相済みませした、因で改めて婿禮の挨拶人を頼む入用を積つて是を錢に替へ、長町邊から雑魚場、長者町梅ヶ辻邊の其日稼ぎの極貧乏な者の祝ひとして遣しました故一同大喜び、切々忠兵衛と云ふ人は剛ひものだと大阪三郷の大評判と成りませした、鴻の池の方では親類初め一同の者忠兵衛の志に驚き、又大勢の者を唯一人と云ひ況て木太刀を持って打勝つた腕前に驚き、皆喜びの祝を致すくらゐ、此事が早くも町奉行松野河内守様の御耳に這入りませした、其頃松野様は大阪の

梅川忠兵衛

西奉行を致して御出に成ました、是は三都三名奉行の一人で、
三都三名奉行と申すのは江戸で大岡越前守、大阪で松野河内守、
京都にては石河土佐守、此御三人が三都三名奉行と申します、
時代は皆遠ひます、此松野河内守の龜鑑も申す可き事蹟をお殘
しに成りました、此松野河内守と云ふ御方は奉行に成つた時、
を變て市中の評判を聞いて歩行かれ、或時は人の出る處又
蕎麥屋風呂屋鬘結の會所などに立入られます、或日松野様蕎麥
屋に這入つて蕎麥を喰べながら、松野河内守様で、松野河内守
ふ事だ、何と云ふ人かな、主、松野河内守様で、松野河内守様
す、主、剛、ふ、思ふ、御座り、松野河内守様、松野河内守様、
何と云ふ人だ、松野河内守様、又、外、松野河内守様、
す、長、い、事、は、御、座、り、ま、す、ま、い、

梅川忠兵衛

「何んの松野河内守様が悪いと云ふ事ではありませぬ、奉行
は代りませぬ、夫等が賄賂を取つたり致しませぬ、自然奉行
が名を悪く致しませぬ、夫等が賄賂を取つたり致しませぬ、
ます、ま、い、松野河内守様、松野河内守様、
夫も猶且狸奉行では分りませぬ、河内守様は狸奉行迄聞ば、
山で百軒聞ば、百軒ながら評判が悪う御座います、大に心配され
て居られ、大に、紙に假名で「とをぞくはおはさかよりさし
が、あり、す、大、き、な、紙、に、假、名、で、と、を、ぞ、く、は、お、は、さ、か、よ、り、さ、し
う、に、あ、り、す、大、き、な、紙、に、假、名、で、と、を、ぞ、く、は、お、は、さ、か、よ、り、さ、し
ない、故、野、河、内、守、御、座、り、ま、す、ま、い、
ふ、心、持、で、新、様、な、物、を、張、つ、た、が、成、て、天、清、與、力、一、同、を、集、め、
の、興、力、進、出、ま、し、て、甲、盜、賊、は、大、阪、よ、り、紀、州、に、あ、り、左、す、れ、ば、私、

梅川忠兵衛

し、其後奉行の位置に御座り被遊た位のお人で御座いますか
ら、成程御名奉行と云ふても可いので御座りませう、其位な河
内守様でありませうから、此度龜屋忠兵衛の致し方を御喜びあつ
て、水祝は水浴せと云ふ事は宜敷ないし御禁制に相成り、忠兵
衛を御呼出しに相成つて、大阪三郷取締り御付られませう、忠兵
衛も折角の仰せ故お請致しませう、改めて苗字帯刀御免と
成つたのは遠慮を致しませう、どうも三郷取締りに成てさへ何
どなく世間の人が云ふであらうに、其の上苗字帯刀までも御請し
ては却つて憎まれ者に相成ますから、斯云ふ次第で一日置には役
所へ出張つて三郷取締りの任を盡します、是ばかりなら可う御
座いませう、承量の優れて居ると云ふので、河内守様御鑑定
を以て龜屋忠兵衛儀天満道場に出張つて與力手付同心に對し武
藝を教ゆるやうと仰付けられませう、是は忠兵衛も遠慮申上げ

梅川忠兵衛

の考へでは是は紀の國と大阪の間、大盜賊の住んで居ります事
を密告致す者ど心得ます、乙「私等とて左様心得ます、松成福
盜賊は大坂より紀州にありとある、甲「左様此書いてある處を見
れば、大坂紀州の間に大盜賊の居りますのに相違御座りません
能々御手配に相成りまして宜う御座りませぬ、松「イヤ、河内
は左様考へん其方等は一番に讀むから盜賊は大坂より紀州に
り、大坂紀州の間に大盜賊が住んで居ると云ふやうな密告を致
したやうに考へるが、ではなにかとも思はれる、先音を切つて讀
で、見なさい、音を切つて申すすと……河「どうぞくは、甲「盜賊
は、河内と力衆にあり、よりさしうにあり、河内守殿容を整し、
「此時に御奉行松野河内守殿容を整し、松野河内守勤役中は
與力同心共を一通り吟味致すから左様相心得る」と是から一々
不正の証據監跡を取上げて天満與力手付同心に至る迄悪者を別
不正の証據監跡を取上げて天満與力手付同心に至る迄悪者を別

梅川忠兵衛

りは過ぎました、相澤が忠兵衛を憎む事は日一日と烈しく御座います、尤も多いですから多少は相澤方になつて同じく忠兵衛を憎む者もあります、終には思ひも寄らぬ大難が忠兵衛の身に振懸かつてくるやうな事になりました。或日の事で忠兵衛は尼ヶ崎の同業者尾張屋三右衛門方へ参りました。或日の事を爲替金を百兩懐中致しまして、恰度燈火の點かうと云ふ時分通り掛りましたのが新町九軒の吉田屋喜右衛門の前で、すると吉田屋の龜屋と呼ぶ者があつたので、天満興力の古屋萬右衛門中條孫八郎の兩人で参りましたのが、通るのを見て組頭が一寸呼んで來り、云ふ事で萬龜屋、お前の通るのを見て組頭が一寸呼んで來り、一寸立寄つて貰ひたい、此中條の古谷だのと云ふ者は相澤の弟子で、道場へ出張する時は一つ所で御座いますから、忠

梅川忠兵衛

兵衛も願は見合ますが別に心安くする人ではない、忠兵衛も願は見合ます、些少取急ぎますから……中宜いじやないか左様な事を云はんでも、鳥渡來て呉れ、手間は取らせん、御頭が待てお在だから忠兵衛も上つて見ると、正面に控へて居るのが相澤八郎、いから忠兵衛も上つて見ると、正面に控へて居るのが相澤八郎、斷者頼間も七八人來て居ります、相あゝ忠兵衛か此方らへ來いよ、扱日々道場で面會を致すが大勢の手前打解て話も致さん、機があつたら一杯遣はしたいと思つて居たが、幸の所が、今日一杯遣はさう、龜屋遠慮しては不可ん、忠兵衛も致しませんでした、道場へ出張りまして、手前を碌々御挨拶も致しませんでした、此頃弟子が追々貴様の方へ参つて了ふた、は、はい、いや何方

梅川忠兵衛

にしてても構ひはせんけれど、何より繁昌で結構じや、忠恐入り
ます事、相先ア、道場の事などは何うでも可い、何も武藝
を申立てて知行を頂戴致して居ると申す譯ではなし、天満興力の
役目を持た身で眞の頼まれて居るなく武藝指南をする云ふ、
言ば外の事だから別段に氣にかけやうな相澤八郎ではない、
忠兵衛一杯飲め孫ア、忠恐入まして御座います、
私くしは深く頂戴を致しませんので、御盃は少さいのを戴きま
す相これ、左様な事を申すな、飲でも飲まんでも今日は相
澤八郎が勤める盃、一つ位は請ても宜かるう、是で遣れ、五合
這入るうと云ふ大盃を出して與した、忠兵衛は迷惑ながら夫を
取る、古屋中條口を揃つて古屋大層繁昌で可いな、併し
腕前と云ふ者は別段じや、孫貴様が稽古を致して居るから、併し
場へ参ると中には先生く、と云ふ者がある、は、は、併し市

梅川忠兵衛

中へ出れば、脚屋忠兵衛だ、我々は別段一步譲る處は無い
わ、相忠兵衛、萬龜屋孫、と方々から呼寄せる故、
忠兵衛は、ア、是は嘲弄ふと云ふ積り、何か了簡があるのだ
わいと思つたが、其様な事に腹を立てるよふな忠兵衛ではない
から一々應對をして居る。

第十三席

忠兵衛は相澤を初め古屋中條の三人を、可い程に待遇つて居り
ます、直接の悪口となつて來ました、相、龜屋、一盃飲め、忠、最早澤
山頂戴致しました、古、これ、折角相澤氏が被仰るのだ、遠慮す
るな、は、は、斯ふいふ工合に武士の間へ坐ると町人は情け
ないものだ、体が極らんのふ中條氏、是などは大和の五條三口村

梅川忠兵衛

の者だ、申すが、夫こそ穢多であるか、乞食であるか、身分の知れぬ者だ、幸ひ今日では大阪三郷取締りに成つたが、松野河内守殿も眼が眩んだと見ゆる、此龜屋忠兵衛を用ひて天満の道場で武藝を教へさせるとは嗚呼の仕業だ、又此奴も餘り大面をするから奇つ怪だ、爾ではなにか、高の知れた素町人、全体なら何やう仰せられても御免を願ふが、當然、令知つて居る、劍術でも知らぬと申して違慮するのが當然だ、夫に宜い事として道場に出張つて、やれ小手が上るとか足の踏様が狭いと知つた振り、いやもう實に成上りの威張るのは醜いものだて、あゝ龜屋、これ忠兵衛、貴様は全体何處の馬の骨だ、忠へい……中、大和五條だと云ふが、乞食か種多か何だ、貴様は忠何かお心に障りまし

梅川忠兵衛

らう、生若輩の身を以て餘り高慢の言を云ふな、古相澤氏忠兵衛に何か肴を御遣はしなさい、相肴を遣れどか、と前に在た皿を引寄せ、灰吹に溜つて居た痰唾を夫へあけて、自分も去へ痰を吐き、相龜屋忠兵衛の喰物は是が相應の物だ、と突出す、忠へい、恐入りましたが、左様な物は頂戴した事が御座いませぬ、相な頂戴した事がないと、貴様なぞは魚の骨をしやぶるなぞが身分に相應だ、大膽な奴だ、本來なら遠慮して居るが當然であるのに、變態酒でも飲はうと云ふ氣で来たらう、飲して遣れ、
「はい」と今まで一座の様子を見て居た大勢は、相澤八郎が言葉に従つて龜屋忠兵衛を悉く嘲弄を致します、爾成て來るも藝妓でも仲間でも相澤の機嫌を取り損つてはなりませんから、忠兵衛を弄り物に致します、と計り頭を下げるものも、元來が

究

梅川忠兵衛

身に生意氣な奴と思召ませうが、許しが出来たから御見物を願いたうぞんじます、お使ひなさいと忠兵衛の膝の所へ投付た、で御座りますか、お使ひなさいと忠兵衛の膝の所へ投付た、忠兵衛懐中つといたした、桐卷より二十五兩包みをする、封をし、懐中つといたした、桐卷より二十五兩包みをする、封がぎら、見よと云はんばかりに盆の上、高盛にする、封芝居では官金の封を切て散る計り、是が芝居で、尤も和路へ道行の一件となつて居ますが、彼は捏造事で、官金の封を切ました、大阪の千日前で御座り、是は遠州家の封じ金を切りし、代りに依つて、大阪の千日前で御座り、是は遠州家の封じ金を切りし、同様のものでは、了ひました、忠兵衛に相成ましたから、龜屋は三

梅川忠兵衛

山飲まん酒故何様したら可からうと思つて居る中、相今日は相澤八郎が女子等へ祝儀を遣はそうと見よかしに紙人から四五兩の金を取出し、相さア是を一同へ遣はすから撤ぞと云ひながら、剛いもんじやと、名々金を拾ふて居る、古澤萬右衛門は忠兵衛の側へ進寄つて、萬貴様も鬻應酒計り飲で居んど、持合があるなら、報間藝妓に撒て遣らんか、相其様な事は知らんだらう、只々金を蓄る事は、かり思ふて居るのだらう、●恐入り、ました、左様ならば、是に居りますか、女子等に少々ばかり金子を遣れ、は、玉のつても出さう、御座いますか、今日細い煙りを立て、居る飛脚屋で、見物では、御座らんか、忠左様なら、御免し下さいまし、町人の

忠兵衛の包切を官金と作りへましたは三代目の話を混じました
ものと思はれます、扱忠兵衛は百兩の金を残らず封を切て盆の
上へ積上げすつくと立上つたなり、忠誰方が差上げて悪ふ御
座いすから捨金の遊びを致しす、何卒拾ふて一杯飲つて下
さい、と、左りに受け右の手に握みばらくと撒初めた、家
内の者は奉公人に至る迄それ金撒が始まつたどしと出て來
て拾ひます二兩や三兩の金でない百兩の金を撒のだから、轉ぶ
やら倒れるやら大騒ぎをして拾ひます有様は恰で喧嘩の様で、
相澤初め右屋中條等は唯々呆氣に取られて見て居ります、百兩
の金を撒て了ふと今迄輕蔑した藝妓の間も調子が替り、百兩
且那樣大いに失禮を致しました、と此邊等に在る皿小鉢を片付
けて、厭がる忠兵衛を蒲團の上座にせるといふ、梅商買柄
とは云ひながら俄に忠兵衛を蒲團の上座にせるといふ、梅商買柄

つと致した方が仕方がない、自分の金を自分で遣るのだから何う
する譯にも行きません、兎角する内仲居がそれへ参りまして、
仲太夫さんが御出になりました。

第十四席

太夫が來たどの仲居の報せで、忠兵衛ははつと息を吐きました
太夫が來たどの仲居の報せで、忠兵衛ははつと息を吐きました
取つて歸らうと思つて居る、其中に二人新造に二人禿其坐へ這
入つて來たのを見す、年の頃十七八にも成せうか、紅白
粉は云ふ迄もなく、稱襦姿の立派さ目を驚かすばかり、座敷の隅
の方で忠兵衛は大きく美麗な女が來たと思つて居ます、右の太
夫が忠兵衛を見ると相澤の側へは参らず、忠兵衛の側に参りま
して、太夫貴所は五條の龜谷の若旦那様では御座りませんか、と

梅川忠兵衛

一日の事 小お梅や、薬が出来たかへ 梅殿父さんお薬が出来
て居ますよ 小お梅、雨か、大きに昨日から宜い梅になつた、
何を云つても最早年だなア、少し不快いと直身體が痛んで不可
ない 梅左様で御坐いましたし、困りますね、小お梅は、何し
た 梅喜所に居りますよ 小お梅さんや跡で又鴉を作らへて呉ん
な、 旨くはないが病人は詮方がない、とお梅と咄しをして居る
處へ、 這入て来たのが年頃五十格好、 報ら顔のでつぷり肥つた
何と無く意地の悪さうな男、 男はい御免よ、と上り口から大
で、 是は上宿に居りまして高利貸をして居る甚九郎と云ふ男
小、是は甚九郎さん来なすつたか、 今日は一すお梅でもお前の
處へ遣らうと思つて居た處だが…… 甚いや、不可ぬ、俺
の顔を見てからお梅坊を遣して呉れと云ふのではね、 何うして呉れるのだ
はお梅坊を遣して呉れと云ふのではね、

梅川忠兵衛

あの金は、元利揃へて六十兩、最早先月にも返して貰ふ筈なの
だ、夫が五日だ十日だ、と延て仕舞たが、今日はお前の返答次第
だ、入てある此お梅坊を遣して行く積りだから其了簡で返答しな
い、 夫ども金が出来て居るなら貰つて行かふ、小、そんな大きな
聲をするには及ばね、世間もあらア原中の一軒家じやあるめ
ね、し、餘り大きな聲をするなよ、甚大きな聲は地聲だ、幾らで
も大きな聲をするよ、さア出来たか出来ね、お梅坊を連れて歸る、
ら、今日馬を雇つて来たから荷物と積んでお梅坊を連れて歸る、
金が出来たら、いづつでも請取に來なさい、小、お梅坊の前なんば高利
貸でも分らね、お梅坊、若者か女郎買の尻でもぬぐつた
と云ふやうな金、お梅坊、若者か女郎買の尻でもぬぐつた
何方も貧乏人だ可愛想と思つたから、中へ這入つて事済に成る迄
の金を俺が立替で遣つた處で、先方から返さうと云ふ當がね、

から、俺が借主に成て三十兩借りたのだそれが三月か四月の間
に三十兩と云ふ利が附たア随分酷いエ、夫も相談づくなら詮方
が無として、あの時に証文を拵へて来て扱判を押して呉れどお前
が云つた時、俺ア俄の事で證文を拵へて来て扱判を押して呉れどお前
の書入てあるのは仕方がねえが、娘を書入にして判を押さした
は酷いじやアねへか

第十五席

高利貸の甚九郎却々承知する處ではありませぬ、甚今になつて
小兵衛さん其様事を云ても任方が無に、お前が承知で首と釣替
の實印を押しながら何が書入に成て居ても其時に云はねえで、
いざ返そうと云時に其様な苦情を云つたつて立ものじやねえ、
今日は何が在るから長へ咄は致して居られねえ、金が出来るか、

出来ねへければ……小、さア、長く待て呉とは云はねえ、何
卒此三十日迄待つて呉んな、甚不可ねえ、三十日は扱替で最
早一日も待つ事じやアねへ、お前も下宿の小兵衛と云つて物が分
つて居るとか何と人云はれて居る者じやねえか、借りた金
を返す事を知らねへといふは評判程にもねえ人だ、何して持
て行くから爾思いなせぬ、小、持て行くと云ふても其點だ、甚何處
だか知らねへが在たけの荷物を持て行く、それにお梅坊を連れ
て行くから爾思ひなせぬ、第一人を馬鹿にして居らア、人の
家へ來れば茶を出すとか水の一杯でも汲んで出すのが當然だ
小、是は氣が附かんかつた、甚九郎さん水でも何でも上げな
と臺所の方へ向ひて云ひますと下女のおきんは全じく甚九郎を
憎んで居るから、井に汲んで在つた水を持て來た、甚九郎眼が
眩で居るからがふり飲た處が辛い、辛い辛い、云つて、甚九郎眼が

光

梅川忠兵衛

ヒやないか、併し三日待て居れば、此度拵らへるな。小これお梅、
や、此様な時に娘子供が口を出すものでね、彼方へ行てお
いで、梅如何ぞさう云はないで、口をさかせて下さいまし、證文
中に書入に成て居ると云ふ事です、何にか妾もお咄しを致し
たいと思ひますから、甚小兵衛殿から見ると、餘程お梅坊の方
分つてら、ちやア小兵衛殿に推はね、三日待てやらう、四
日目の朝来るよ、梅はいお來で、是には必らず六十兩の金子を
揃へて置ますから、甚可しく、爾事が極りさへすりや……あ
辛へさん、さぞ辛ふ御座りました、差上ませうか、甚もう澤山だ、
が、は、まだ残り居ります、差上ませうか、甚もう澤山だ、
ちやアお梅坊、四日目に來るから、爾思つて呉んな、と上宿の甚
九郎は歸りました、跡に小兵衛はお梅に對つて、小お梅や何故
取様な時に口を出す娘子供だつて、中々猶豫する奴ヒアね、手

梅川忠兵衛

前を大きくして、自分が持者にでも仕様と云ふ了簡から、證文の
中へ書入れて置たのに違ひね、それ、俺が放意と判を押たの
が誤りだが、三日待て呉れと云つた處、三日待つたつて三十日
待つたて、二兩や三兩と違つて六十兩と云ふ大金が却々出來る筈
はね、梅御父さん何の出來ない事は、御座いません、其金を拵
らへて返して、了つて下さい、小拵らへて返さうと思つたつて、金
が出來やアしない、梅斯うして下さい、私を大阪へ連れて行てお
父さん、御意だ、仰しやいます、あの大阪の穂屋孫右衛門さ
んの處へ行つて、私を娼妓にして下さい、小、何、其様な事だ、
うと思つた、其様な事を云つて、呉るな位牌へ對して、濟まね、
思出しや、婆が死だ時だ、一旦息を引取つたかと思ふと、又蘇生つ
たから、宜い蓋、梅だと思つたら、又息を引取る、何か心残り、
あ、なら、咄しをして聞かせなと云つたら、別段に心残り、は、御座

いませんが、唯娘の事が案じられます、何卒お梅は堅氣な婦を
取て小間物屋の跡を續ぐやうにして下さい、人の爲に成る人は
人の爲に身上を演ず、何卒娘を女郎にしてなんど云ふ事は必ず
しないので下さいまし、娘は堅氣な亭主を持して呉れど、今はの
際に二度三度繰返しく云つた時は、婆さん心配するな何時が
何時迄此様な事をして男を張るの腕をのど云ふ事はしね、俺が
お梅に相當の婿を取つて小間物屋の跡を續がせるからと、俺が
引導代りに云つた時に、婆さんは喜んで榮爾笑つて往生をした
其顔が今でも眼先にぶらついて居る、此場にて成てお前を女郎に
賣つたなぞと云ふ事になると、昔の下に居る婆アさんが何様に
恨むか知れぬわい」と男泣にはるくと涙を溢します。

第十六席

小兵衛が今更の愚痴の涙にお梅も悲しさは一倍で御座います
じつと堪へて涙を隠し、梅いね殿父さん、爾でも御座いませう
が、證文が無ば兎も角も證文が在て見ると斯う申しては濟ません
が、殿父さんが萬々一の事でも御座いますと甚九郎の世話に成
らなければなりません、夫も今が今肌を汚されるやうな事はあ
りませぬ、四五年も経過したら、乾度妾にでもしやうと
云ふ了簡に相違御座いませぬ、夫より私を大阪へ連れて行て娼妓
にでも賣つて、甚九郎の方に金を返して下さい、五年なり六年
なり経ちまして歸つて来て、孝行の出来ない事は御座いませぬ、
幸ひ糶屋の孫右衛門さんは御意で御座いますから、何卒爾な
考へまして、小成程爾だ、眞實込めての悲しい頼み、小兵衛も暫く
じやア斯うしやう、お前が爾孝行に云つて呉るなら兎も角大阪

梅川忠兵衛

に行譯には参りませせん、途中で一晩泊つて翌日新町の秘屋孫右衛門の家へ参りませした此秘屋は置屋で御座います、太夫娼妓も多勢居りませして、置屋の内でも極評判が宜しく奉公人斗りも百人から居りませす、小兵衛は一寸した事から懇意に成りませしたのです、孫石衛門は誠にお兵衛を賞て居る。今恰度孫右衛門萬年青の葉を洗つて居りませす處へ小御免下さい眞に御不沙汰を致した、大和五條の小兵衛で御座ます孫やア是は小兵衛さん能御來で、お時や大和の小兵衛さん御來なすつた、久しく御出がなかつたが能ませア、何卒御上り下さい、時おやまア小兵衛さん御來でなさいませア、御通り下さい、小へ有難ふ、此度は銀を連れて参りましたので、時おや善いお子さんだ上りなさいませし、梅伯父さん御姨さん、先頃は嚴父さんが出ま

全

梅川忠兵衛

へ連れて行つて、孫右衛門殿は大家の主だけあつて眞に氣性の好い人だから驚き、咄しをしたら六十兩の金を貸して呉れるだらう、梅何卒爾して下さいませ、小さう事が極れば今から行つて、途中一晩泊つて少しも早く金が出来来るやうに仕やう、梅直に是か加減も可い、驚いたので病を何處かへ追拂つて了つた、梅は左様で御座いますか、小家の者へは其様な事を云はずに、唯大坂見物に行くといふ事にして出掛やう、早く支度をせよ、子のは相談の上、それへ準備を致しまして、家の者や近所の者へは、假令に用事勞々大阪へ見物に行つて参ります、私に度々参りました、願ひ申しますと、初めて、御座いますから、速に發足致しました、何卒御願ひ申しますと、云ひ置て、直に日の中に發足致しました、扱近いやうでも大和の五條下宿から大阪迄です、此日の中

全

梅川忠兵衛

して種々御世話になりまして有難ふ御座います
奥の座敷へ連れて行く、孫右衛門、小兵衛坐定つて時分の挨拶が
済むと、小孫右衛門さん此度は御願ひの筋があつて罷出まし
た、何卒御聴下さるやうに、孫はあ何御用で、小何卒此娘を
一つ賣りたいと思ひますので、お買下さいませんか、孫あは、
小兵衛さん相懸らず冗談者だ、なんば私共が此様な商賣をして居
ても、娘を連れて来たさア買つて呉れ、可し買はふと云ふ譯には行
かん、そんな事は云はないで、小いじ全くと御座いますと云ふ
のは斯ういふ譯で、と人の爲めに上宿の甚九郎と云ふのに六十
兩の金を借た事を話し、小で證文の中に此お梅が書入れてある
のを知らずに判を押しましたのが此方の誤り、昨日も其奴が來
て種々催促した處へ娘が出まして、後で聞くと自分を泥水へ沈めて其
大それた話をしましたのを、

梅川忠兵衛

金で片を附て呉れる、萬一の事が有ると證文に書入れてあるか
ら甚九郎に身を任せなければならぬと……先ア孫右衛門さん聞
て下さる、私も喫驚しました年頃迄育つた娘を女郎にする、其
様な事では死んだと云ふに濟ないから、いや、其様事は出来
ない、一夜中に源平藤橘種々な人に枕を交すやうな事はさせら
れない、第一女郎屋なんど云ふ商賣は人間のする業じやないか
ら、孫お、小兵衛さん御手柔に願ひます、小孫右衛門さん其處に
お出で居りましたか、是は失禮、孫あは、小兵衛さん誰れと申し
をして居る積りなので、小御免下さい、ついで、あは、飛だ失
禮で、何しろ何でも金を拵らへて先方へ返して呉れど申しませ
娘の孝行實に私共も感心致しましたから連れて参りましたので何
御座います、此娘が六十兩には成りますまいか、孫お時や聴い
たかい、何れも涙が顔れた、小兵衛さんは能い娘を持なすつた、

年をどつた御前さんに苦勞をさせたくないから泥水ぬみづに身を沈め
ても其金を返して遣ろうといふのは實に感心だ、私も變り者だ
話をして下さるならば相談に乗ませう小兵衛さん怒っては不可ん
よ、お前に百兩の金子を進るから其百兩の金を持って行つて先方
へ六十兩返して、餘つた四十兩で此お梅さんとやらの姿を拵ら
へて遣つてお呉れ、實に娘の子供のやうでない、何卒爾してお呉
んなさい、お時や百兩の金を持って来て、小兵衛さんに進げて
んな、それ其處の……いゝね、文庫の方からだアな

第十七席

孫屋孫右衛門お梅が親孝行の話を聞いて悉く感を致し、唯百兩
の金を遣らうと云ふので小兵衛は驚いた、小先ア待て下さい、
石は金を貰らひに來たのではない、買つて貰ひに來たので、買つて

下さらすば外の女郎屋さんへ行つて話しをします、孫私には買ふと
云ふのではない、此様な親孝行の者を店へ出しては可憐だか
らお前さんに百兩只進やうと云ふので、小元談云つちや不可ま
せん、百兩の金を貰らつて有難う御坐いますと云つて歸る小兵
衛じやござせん、貰う譯には行きません、孫私に遣るんだと
ふに、私も孫屋の孫右衛門、一旦出した貨を收う事は出来な
持て行つて下さい、小持ては行きません、孫夫が心得違ひだ
も、小兵衛だ、二人で喧嘩を始めさうなので、お梅は氣の毒さ
うに思つて居る處へ孫屋の家内お時は中へ這入つて時を待つ
て下さい、御咄しの様子では眞に感心な事で御座います、お前
さん、少々お待ちなさいよ、小兵衛さんは貰はないと被仰る拙夫
では百兩の金子を進げやうと申しませすし、夫では何時迄も果し

梅川忠兵衛

が着きませんから、斯なさい、貴所の入用は六十兩、拙夫は百兩
と申すので相談が出来ませんから、八十兩のお金を小兵衛さ
んに差上ませう、小へは八十兩……時、夫で此娘さんを三年私
せもへ御預り申します、其間店へ出すのでは御座いませんよ、
まだ年が十四ですから十四十五十六三年の間宿の娘と同じやう
に琴三味線舞茶の湯は素より裁縫でも手習でも女一通の事を教
へて置きます、小へは、な、成程、時、三年の中にお金の出来た
ら八十兩お持ち下さい、夫も失禮ですが一遍に纏めてお持なさ
らないでも、三兩五兩と御都合で御持なすつて八十兩に纏つた
ら其時娘さんはお返し爲ますとして……何れも利を減かうと云ふ
のではなし、又貴所が病氣其外の時に娘に逢ひたいと思召たら
何時でも迎ひに御遣はしになれば、金が濟ないからお梅さんを
渡さないといふやうな私共夫婦では御座いません、貴所方へ御

空

梅川忠兵衛

連なすつて宜しく御座います、又三年立って御金が出来ないと
いふ事なら私共へ公然娘にお貰ひ申すすければ、其二十兩は貴
せん、小へは……時、六十兩還つても二十兩残る、其二十兩は貴
所のお小遣になりともなさいませ、小なる程、世間の人が爾
申します、桃屋の家はお内儀さんがあるから、あの身代は保つ
て居る、桃屋の家内は恰もんだ、孫右衛門と云ふ人は案山
子同様……孫右へん、孫右衛門此處に居よ、小おつとまた失
敗つた、併し御親切の程は分りまして御座います、左様なら
うか御言葉に従ひますから、証文をして下さいませ、時、い
を致しませ、奉公人となりませうから、三年立て金子の這入りま
せん、時には亦証文も致しませうから、夫では八十兩お金を小兵
衛さんに渡しませうから、孫お前は感心だ、俺は案山子同様だ、
小兵衛さんに八十兩でも何でも進なさい、時、夫れでは御承知な

空

間峠に於て殺害に遭ふの一條。

第十八席

元禄七年七月の二十三日大阪新町の桃屋を立出ました小兵衛は
氣丈な男ゆへ夜通しに歸らふと云ふので路を急ぎ、田中と云ふ
處迄参りまして鳥渡角屋と云ふ宿屋へ立寄りました角是は下
宿の旦那お泊りで御座いますか、小いや、是非歸らなければ
ならん用があるんでな、一寸休んで行ふと思ふ、角是から夜通
しにお出に成りますので御座いますか、今夜は雨を催ふして居
りますし、それには大和街道間峠を夜通しなさいませぬのは物願で
御座いますから、今晩は御泊なさいませぬ、小なアに今云ふ急用
だから、な、此處に泊るくらいなら大阪へ泊ります、御面倒だ
が提灯を借して下せへな、角へは、それはお安い事で、併し

何ならお泊りで明日早くお立に成たら如何で御座いますしやう
小いや、そんなら提灯をかりませぬ、馬の便りに返しますから
角左様なら氣を附て御出なさいませぬと云ふのを後に聞いて小
兵衛は提灯を提てすた、急いで参ります、半道計り來るとば
つ、降つて來た、其中に風が出て來る有様なので小兵衛も是
は失策た、嵐にならなければ可いと思ひながら急ぐうちに、
段々激しく降つて來ましたから、小いや、飛だ事をした泊れば能
かつた、と云つた處が詮方がない、急いで行くうちに大和街道
間峠へ差かゝる、是は音に聞けし悪い所で今峠へかゝつて來る
と、さつと吹來る山嵐に提灯の燈火は消へて眞の暗、小あッ、
是は飛だ事をした、初めから提灯を持たなければまだしも、今燈
火が消ては一足も歩行けねへ、どうしたものだらうと松の蔭
に佇立んで居りました處へ一挺の駕輿が大阪の方をさして來ま

梅川忠兵衛

したので 小「あアもし駕輿屋さん ○あ、喫驚した、何だい
△「何んだい爺さん 小「誠に濟ませんが何卒燈火を貸してお貰ひ
申したいもの ○さうか、俺は何だと思つた △「棒組年寄だ、可
哀想に今貸て遣るせ、且那少々待てお呉んなせへ棒組此方へ來
て圍つて居ねへ火が消ると此方も困るから、爺さん此處へ來な
今頃から何處へ行なさるのだ 小「へ、大和の五條の方へ参りや
すんで △「夜通しか、大變だなア、消すと不可ねへせ、可しく
さうだ △「此度は手拭か何か入れて行かねへと又消るせ 小
有難ふ存じます」と禮を云ひ頭をさげる途端に懐の財布をどつ
さりと落した、錢の音と違ひ金の音は良いもので、小「兵衛はは
つと慌てて夫を懐へ入れると駕籠屋二人は呆氣に取れ様子を見
て居る ○「氣を附て行な 小「大きに有難う御座います」とした
小「兵衛は急いで参る、 駕籠屋の方は大阪の方へ指して四五

梅川忠兵衛

町來ると 客「駕籠屋々々々 ○へ、且那何で御せへます 客「一
寸下して呉れ ○「御小便ですか 客「いや小便ではない ○へ、
客「思ひ出した用がある一旦歸らんければならんから、此處迄で
可いから下して呉れ ○「そんな事を云はねへで且那大阪迄乗て
お呉んなせへな △「御約束申したので御座いますから 客「いや
駕籠賃は遣る用事を失念して來た ○「相棒駕籠賃を下さるとよ
○「且那雨具が御座いますまい 客「いや、要らん、是は籠駕籠賃
だ、是は酒代だ △「棒組駕籠賃と酒代で金二歩だ ○「且那何も
滅法なこつて、有難ふ存じます、御供も致しませんで斯うやつ
て酒代迄頂戴して 客「いや早く垂を上げて呉れ ○「今桐油を取
て上ます △「且那御穿物が駒下駄では滑ります ○「弱つたな
方共兩人へ遣はす二人で分る △「且那是は如何致しませう一客其
ア二人で分たら片方づゝだ △「且那是は如何致しませう一客其

居ります金で御座いますから、左様で御座いますか御用達で
 せうとは申されません、尤も私しやア六十兩金があれば事が済
 ので御座いますから、茲に八十兩あつて見れば二十兩餘分の金
 がある都合ゆゑ、此の二十兩を貴所様へ差上げませう、で五十
 兩要る處ろを二十兩金が有つたら來月十日と仰しやつたら後三
 十兩出來ないとも御座いますまいから、旦那様何卒二十兩御持
 ちなすつて下さい、武いや事の分つた老人、爾云はれて見ると
 拙者一言も申所はないが、何しても五十兩なければならぬのだ
 から、斯ふして呉れ、六十兩で事が済むと云ふ處ろを五十兩拙者
 渡して呉れ、三十兩其方に遣はすから其三十兩で來月の十日迄
 ……小旦那御待なさい、お前さんの都合は大層可いが私
 の都合は大に困ります、先ア其様な事を被仰らないで、何
 御見附け申せば未だお若い、物を云へば欠点が出る、ね、何

を五十兩長い事ではない來る八月の十日迄拙者に貸して呉れ
 たり國郡名前は勿論開て置て來月十日に相成れば多分の利を加
 へて送り届けるから、何卒迷惑であらうが武士が手を下げて細
 むから借用をさして呉れまいか、小はア左様で御座いますか、
 夫は先ア御目に着たと云ふなら詮方も御座いせんが實は此財
 布の中には八十兩金が入つて居ります、武うむ、小仰しやる
 所は御尤もで、金は僅か八十兩だ、筋が悪いから事に依たら二
 三人の命に關はると被仰れば、合賦でも御氣の毒に存じませうか
 ら、五十兩御貸し申しませう、差上ましやうと申したら宜敷ふ
 御座いませうが、私しや一人の娘を先は言へませんが大阪へ連
 れて参りまして、娼妓に賣ました、夫も娘の氣から出て、娼妓
 になつても私に苦勞をさせまいと云ふ孝行心、夫故只今涙の袖
 を絞つて別れて参りました所で、是は云はゞ娘の孝行が籠つて

にも云はないで二十兩御持なさい 武二十兩では拙者の役に立
たんから五十兩貸して呉れ 小へは 武若し貸さんと云へば詮
方がない、一旦是へ出た以上事に依たら暴い事も致し兼ねど
小なに暴い事をしなければならんとは何だ、御付が私を殺し
て金を取らうと云ひなさるか、是は面白い、私やア劍術も柔術
も何にも知らねの田舎者だが、理屈だけは少々知つて居る、全
然一文も遣らねへといふのではなく、五十兩要る處を二十兩上
げると云つたら、大抵ものが分りさうなものだ、其んな事を云
なら百も遣る事は出来ねの、私は娘の孝行で涙を流して賣た身
の代金、何ば何んでも私の手から御渡し申事が出来ねのから、
殺した上で奪て行なせぬ、其様な事を恐がつて此夜旅が出来
もんか、御武士心得違な事を云はねので二十兩持て行きなせへ
武どうしても貸さんか 小貸せねのよ 武貸さねのよ 小貸

さねといつたら諄いや 武貸さんといへば仕方がない、脊に
腹は替られん、覺悟をしろ」と突然に柄に手を掛けて居るから
堪まりません、振打に小兵衛へ斬付た、小兵衛は助へ体を引か
うと致したが間に合はない、肩から掛て斬下げられ 小「あッ」
と云つて倒れる所を飛掛つて又斬付けたから結局息は絶えて了
つた、血を拭つてびたり鞘に納め小兵衛の懐中にある財布を取
上げて 武事を譯て話をするに聴分のねは奴だ、乗かゝつた船
あゝ殺生を致したが仕方が無い」と金を懐中して行くとすると
○且那 △もし且那は 武な、何だ ○へは 武誰だ △怪
しいものでは御座いません、唯今御供をして参りました駕籠屋
で御座へます 武駕籠屋か △御跡を慕つて是迄來やしたが、
且那酷い事をなさいましたねへ

流石の武士も思はぬ駕輿屋に驚きました。今更仕方がありませ
 ん。武見て居たか。〇「は、息の根を止る迄」と駕輿屋兩人は武
 士の側へ寄つて。△「残らず見て居ました。斯うなつちやア仕方が
 ありません。一盃飲ましておくんませぬ。武飲まして呉れと云ふ
 のは金を呉れると云ふのか。〇「何卒符牒分けをして呉んませ
 ぬ。武可し待て居る。△「へ、財布の中から金を出して。武さ
 ア持つてけ。△「有難う存じます。……かい相棒五兩だ。〇「五兩、
 旦那二人で五兩で御座いますか。武さうだ。〇「へ、左様で御座
 りますか。是はお返し申しやせう。武不足か。△「不足だね、
 此様な行は私等がする事だ。お前さんを駕輿から下して置て
 此方で仕ようと思つた仕事、必定財布の中にやア二三百兩と既

むだのだ、それを猫ばしにしやうとは餘まり虫が能すきやア
 〇「お武士長へ短けは云はねから三つに分て一人りが一つ
 宛持つて往うぢやねか。俺ちらア唯の駕輿屋じやね。△「爾
 だとも、棒組の云ふ通りだ。肩書の付いて居る人間だ、飛ん
 でも無事としやがる。五兩、八兩の端下金を貰つて有難う御
 座いますと認るやうな人間じやね。誰だと思ふ。丹波の兵藏で
 ぬのは俺だ。〇「川添の虎松と云ふのは俺様だ。武士財布を出し
 て見てゐる前で三つに分るい。武ふ、何か五兩の金で不足だ
 から三つに分る。云ふのか。△「爾ふよ。武財布の中には八十兩
 有たが、縦令五兩の金でも恵んでやつたのが不足だと云へば一
 文も遣らんまでだ。丹波の兵藏に、なに川添の虎松だと、白痴
 奴、左様な事を聞いて其様なら三つに分よう。云ふような者で
 はないぞ、不足なら是で持つて行け。ときらりと長いのを扱て

鼻の先は突附ると、二人りながら話しは大層強よかつたが、又
物を見ると坐つてしまつた。○且、何卒御勘辨なすつて
下さい、ついでに御座います、相済みません
御勘辨を、△命ばかりは御助けなすつて下さい、武さまを見ろ
川添だの丹波だのと嚇して人の金を奪らふとする不届者、手前
達の嚇しに恐れるやうな身共ではないわ、併し出した物だから
五兩は二人に遣はす、半分宛分ける。○有難ふ御座います、武
駄つて居る。次へは、武、其方等が此事を喋つて批者が召捕りで
もなれば、兩人を抱込で、行ぞ、名前も面も存じかざる、可いか
△「おや、武、乾度、吩咐たぞ、氣をつける」二人ながら仕方
がないから、此所らにぐすくして居て、人殺しを奪返すと大變
だどぶる、く、慥へながらすたくして、駕輿をかきしてある所へ行き
ました、跡に武士は悠々として行つて仕舞ました。扱夜明前に

二只

通りかゝつた飛脚が、小兵衛の死骸を見附け人殺しがあると吃驚
りして、田中の宿へ参りまして、此咄しをする、直ぐに手分を致し
て、死骸をさがして見ると、角屋の提灯が、出る、云ふので、角屋で
は、必、五條の、小兵衛に相違ない、と、大層に驚いて、届けをする、
此、小兵衛は、前に申上げた通り、田舎、幡院だから、顔が能く賣れて
居ます、で、皆々、小兵衛と、んは、何處へ行つたのだらう、なせ、夜旅を
したのだらう、と、評判をして、可憐想だ、なぞと噂をして居ります、
角屋の主も、掛りの役人と、立會で段々、調ると、大、阪、新、町、榎、屋、孫、右、衛
門の處、行つた、と、様子が、分り、ました、から、右の、次、節、を、報、知、致、し、ま
した、一、方、では、あり、ませ、ん、孫、右、衛、門、は、直、に、駕、輿、を、仕、立、て、現、場、に、乗
込、んで、参、つ、て、見、る、と、最、早、情、け、な、い、姿、に、成、つ、て、死、居、り、ま、す、
い、て、斯、う、な、つ、た、ら、仕、方、が、な、い、から、御、検、視、を、済、ま、し、て、死、骸、は

107

梅川忠兵衛

た奉公人が病死を致しました。是か爲に孫右衛門夫婦が悉く心配を
しに奉公人も減りました。是か爲に孫右衛門夫婦が悉く心配を
身だから、何卒妾を店に出して呉れると頼みました。孫右衛門
に、して見ると、何卒妾を店に出して呉れると頼みました。孫右衛門
前、ばかりは娘分にして置く云ふのを是非と云ふから孫右衛門
夫、婦も、其様ならばと梅川と云ふ名で太夫に出しました。者で、
處、が何分にも年は十七の花盛り、廊で一二を争ふ美女と来て、
其、上、諸、藝、に達して居りますから、梅屋の梅川と申しては並びない位
十七、の、春、から賣出して一年立か立ぬ内に大評判の全盛、實に
で、は、飛、鳥、も、落、る、斗、り、です、斯、云、ふ、次、第、で、勤、め、を、し、て、居、り、ま、し、て
も、親、の、敵、を、探、し、出、し、た、い、と、の、一、心、は、片、時、も、忘、れ、ま、せ、ん、何、卒、
一、日、も、早、く、知、れ、ま、す、や、う、と、神、佛、に、祈、願、を、込、め、て、居、り、ま、す、位、所

梅川忠兵衛

大和の五條下宿に持込まして、お梅も参り菩提所で御座いま
す。念佛寺へ葬り、後の借財や何かの始末は梅屋孫右衛門が萬事
世話を致し、お梅を連れて大阪へ立歸りました。お梅も其當座は
涙に掻き暮れてばかり居りました。が、其れも其管兩親に兄弟
とて一人もなし、冷で木から落ちた猿同様、只此上の頼りも致す
は、孫右衛門の法事ばかりで御座います。で、夫婦は懇ろにお梅を
慰め、七日七日の法事、其外、同向供養懸ろに致しました。是か
お梅は孫右衛門の内、其の奉公人もつつかす、元來親の氣
の道は素より讀書読経等の稽古を致して居りました。が、元來親の氣
を受け、氣丈のお梅、親を殺した者を探し出し、敵を討ちたいと
明暮心に思ふて居りました。然る所、是より儲り三年ばかりも立
つ間に、梅屋孫右衛門の家は不幸の事ばかり重なり、随分あつ
た。資産も倒れ、屋敷も右衛門の家は不幸の事ばかり重なり、随分あつ

千兩の金で男の手を切つたり役者買をするような事なら、氣の毒だが、一丈でも貸せません、買物に依れば直に遣るが何をす
るのだ、琴はい……善いや、夫を言はなくちや不可ない、琴左
様ならお咄を致しますが、太夫を一人り買ます、善、何うかして居るせ
を一人買ますので、善、先ア顔を洗つてお來、何うかして居るせ
女が女を買つて見た所が詮方が無い、別段に業しみに成はしま
いに、縦や寝た所が見合をするばかりだ、全体何をかうのだ、
田屋喜右衛門とか云ふ家へ遊びに參られまして、此頃忠兵衛殿新町の吉
云ふのが敵婿ださうで、御座います、私は決して倍氣で申すので
は、御座いませんが、且、那様が赤い顔をして色里へ出入りをなさ
る、折角御鑑定を以て三郷取籠りを仰せ付られました、御奉行
様の御耳でも道入ると最早忠兵衛は身を持崩した、色里廻いを

すると思はれませうし、終には御奉行様の御鑑定違ひにもなら
うかと思ひますから、事……妾に是と申す咄し合手もなしす
るので、御座いますから、其梅川さんと云ふ人を身受を致して手
許に置き、姉妹全様にして居りました、且、那様も新町へ入ら
つしや、様なくも御用が足りやうかと思ひます、私、咄し合手
が出来る様なもの、其梅川と云ふ人を身受して家に置たいと思
ひますので、伯父さんに金子の拜借を願ひますので、善、剛、
い、見上げたもんだ、實は私も聞つた事が出来た、あ、云
ふ、堅い忠兵衛殿だ、何したか、此來新町へは、か、外に詮様
ふ、事だが、意見を致したか、それ、何、か、外に詮様
ら、うかど、種々心配して居る次第、所へお前が先夫を聞出
して倍氣も、種々心配して居る次第、所へお前が先夫を聞出
宜しい、私、が身受をしてや、る女が行つて、身受も出来まいから、心配

八十兩で手打に致します。善夫に付ては明日と云はす今夜直ぐに家へ連れて来て呉れ、爾すれば改めて私しが手から忠兵衛に還るからと話しが極りました。孫右衛門も宜敷う御座います。ど其日の中に梅川に向ひ、向店の善十郎殿から身請だから、今日から店を引いて善十郎さんの處へ行つた。言交した事もあつて、驚たのは梅川で御座います。忠兵衛とは言交した事もあつて、度も遊びに来た事のない向店の善十郎さんどやらが身請をするとは、はて何うしたものかと思ひました。勤めの身体、殊に大恩を受け、孫右衛門の云ふ事を嫌ひました。云はれず、はいと承知を致し、したから、直に駕輿で向店の方へ送られ、妹で、因で善十郎は忠兵衛を呼ばして、善是は私の義理ある妹で、是迄他へ遣つて置いたのだが、此頃家へ歸つて居るからお琴も身体が悪い。ようだしするゆへ、何かに付けて何卒此女を使つて下さい、お

第二十二席

をすするな、明日とも云はす是から直に事を纏めてやる。梅屋孫右衛門も満更知らねわ者ではなし、孫右衛門を吉田屋へ呼んで咄しをしやふ。琴左様で御座いますか、伯父さん宜敷願います。善宜しいくと通人の善十郎、大呑込で、お琴を家へ待せて置て直に九軒の吉田屋へ参り、梅屋孫右衛門を呼んで落籍の相談を致すと云ふ一條。

扱善十郎は梅屋孫右衛門を吉田屋へ招きまして、實は斯々爾々の次第ゆへ、何にも云はず梅川の身請をさして呉と云ふ話しを致しました。難たのは孫右衛門、孫世間に爾云ふ御家内が又とあらう筈は御座いません、實に何うも龜屋の御内儀は御立派な者で御座います、眞に感服致しました。私も奮發して元金の

梅川忠兵衛

琴や手元に置いて忠兵衛殿の世話をさして呉れるやうに」と其
儘忠兵衛へ對して梅川を遣はしました此時の忠兵衛の面目な
實に穴があつたら遣入りたい位で、ア、扱は私が色に崩れて新
町通ひをするとでもお琴初め思ふたか、それも道理、あゝ乃公
の詮方が不可かつた、併し今となつて實は敵討を頼まれたと云
ふ話しは爲かねるし、忠兵衛詮方なく忠折角の思召しで御
座いますから貰らつて参ります」と言つてお琴同道で立歸り
取めて梅川を妾と致しました、梅川に近付いて咄しをする事は御
から、お琴の胸を察して餘り梅川に任へますから、お
座いませせん、梅川も充分遠慮して眞實お琴に任へますから、お
琴の方でも勞はつて遣ると云ふ有様で、三人仲睦じく暮して居
ります、梅川は一日も早く敵の所在を知りたいと思ふて居り
ます。彼是するうち二月三月と立ちますると、一日の事忠兵衛

梅川忠兵衛

方へ怒つて参つた者が在ります、是は梅ヶ辻の山田の喜藏で御
座います、元は道樂者で御座いました、當時は忠兵衛のお蔭
で人足廻しの頭をして居ります、殊に役に立つ男で御座います
から、松野河内守殿に忠兵衛から申立たので、十手捕細御預り
で探偵を致して居ります、處が過般から播州無宿三つ石の五郎
殿と云ふ者の召捕方で御座います、其喜藏が歸つて来て参りましたので
喜且、那様か、早ふ御座います、忠喜藏かい、何日戻つて来た
喜へ、昨晩歸りました、昨夜参ろうと存じました、遅くな
りましたから今朝出ました、御座います、少々且、那に内々伺ひた
り、こが在て参りましたので、御座います、人の來ない處へ御案内を
願ひます、忠、爾か、誰も外に來る者はないが何だ、喜へ、外
の事でも御座いませせんが、此方に梅川が來て居ると云ふ事を聞

梅川忠兵衛

ましたが、本統で御座いますか。忠、お前にさう上下を付て云はれると、大きに赤面をする。梅川は来て居る。喜梅川が来て居る。ヒヤア御座いませぬ、貴所ばかりは大したお人だ。剛義な方だと思へばこそ、私も斯うやつて御出入をして居りますし、分て松野河内守様から十手捕縛を預けられて探偵をして居るのも、皆んな貴所の御世話で御座いますから、重ぬぐ有難いと思つて居りました。が、今日と云ふ今日お前さんには愛憎が盡て、忠兵衛と云ふ人は尙多剛人だと思つたら、飛でもない見損なつた野郎……忠、野郎とは何だ。喜、なに野郎で深山です。今日はお前さんの返答次第で、山田の喜藏は了簡だけの一番挨拶をする積りです。来たんで、忠、何がそんなに腹が立つな。爾云はないで、談り話して呉れたが可い、今酒でも……喜、酒なんぞは飲ねえ。や、忠、酒は飲ねえ、そんなら茶でも。喜、茶も飲ねえ、お前さん

梅川忠兵衛

の了簡の奥が分る迄は、茶も酒もなんにも飲ねえ。忠、何で其んなに腹を立つて居るんが。喜、話しを聞けば、梅屋の梅川を御新造が身請して、向店の善十郎さんが身内にしてお前さんの家へ連れて来た。と云ふがさうですか。忠、さうよ。喜、さうよ。とは何です、おへても御賢なせぬ、女ど云ふ者は、信氣の多いもの、お家の御新造に限つて生れが生れたから口へ出した。たり顔へ出したりして、信氣をなさるような事は、ない。迄もさ、自分の亭主の訓染の女郎を、お請けをして、側へ付て置く。と云ふのは、心の中、何様に泣いてお在でなさるか知れやしません。梅川の側で居て、お前さんが宜い氣に成て、女房が身請をして呉れた。梅川の側で居て、お前さんが宜い氣に成ると云ふのは、至体且、那に似合はね。お事では、今日来たのは、其何で……話、跡にして、私の見てる前、梅川へ暇をやつてお呉んなさい、出て行なければ、私が呟き出してやる、御新造の志を

酌みもしねねで、何ほ自分が人をたらす商賣をして居たつて餘
まりと云へば餘まりだ、梅川の腐れ阿魔奴、私しが引摺り出す
から何卒梅川へ睨をやつてお呉んなせね、忠成程家へ梅川を置
いたのがお前の氣に適らないか、喜適らねね、大層適らねね、
第一旦那が新町通ひをしたのからして……其れも聞きやした、
天満興力の相澤八郎その人はお前さんに恨みがあるから、取で
も搦せやうと云ふ所から、九軒の吉田屋へ連れ込んだんで、だ
けれどそれには唯一晩だ、其後は可い氣に成て梅川の所へてく
く、通ひヒやありやせんか、大休お前さんでれ助だから不可ね
ね、忠でれ助とは何だ、喜夫とも斯う云ふ譯があるよ云ふ、何
か咄しでもあるなら聞かしてお呉れなせへ、忠其譯か……喜
ねねんでげせう、忠いや、ある

第二十三席

忠兵衛は喜藏に迫まられて大きに因却致し、忠實は梅川に頼ま
れた事がある、其件に付て常に彼所へ行て居たのが誤りだ、喜
其頼まれたと云ふは何様な譯で、何ふ云ふ事を頼まれたので御
座へやす、忠夫は咄しの出来ぬ事だ、喜話が出来んければ矢張
り梅川にでれ込んで居たに相違ねねんでせう、忠爾云ふ譯では
……喜無ければお咄しなせへな、話の分るまでは、十日でも
二十日でも動かかねへから、忠夫れ程迄に云ふなら云ふて聞かせ
ようが、決して他言をして呉れるな、喜私も喜藏です、他言は
しやせん、忠實は梅川は親の敵討ちをするのだ、喜人を馬鹿に
して面白くもねへ、高の知れた女郎が親の敵を討つ……人を馬
鹿にして、忠馬鹿ではない、唯今を距る事四ヶ年後元祿の七年

梅川忠兵衛

七月二十三日、大和街道の闇時で五條下宿の小兵衛と云ふ者が殺されたのを貴様知つて居るか喜へへは、あれは田舎に珍らしい義侠なもので、二三度逢つた事がありやす、年は取居るが氣丈者でした、忠其小兵衛の娘が梅川だ喜へへは、
屋敷右衛門の所で八十兩金を拵らへて、其金を持って歸つた晩が七月の二十三日、闇時で殺されて了つた、殺した者は武士だか町人だか、但し盗賊の所爲だか知れまいが、其後梅川は一生懸命、どうか親の敵を討ちたいと云ふ所から神信心等をして居た所へ、私が一寸した縁で近所に成つた時に、
私、この者ではあるし、俺がまた久次郎の頃に、
としようど云ふ所を、俺がまた久次郎の頃に、
から、敵の所在が知れたなら助太刀をして呉れ、敵討をさして

梅川忠兵衛

呉れと云ふ願み、爾ふ云ふ大事を願まれた以上は、後へ引く譯にもならんから、因で繁々参つた譯で、詰り詰り合たが此方のあやまり、敵討ちを頼まれたに付て振捨る事が出来なから、
く通つてやつたのだ、夫をお琴も善十郎も知らんから、
私、色に凝れて梅川の許へ参つた様に思つて居るに相違ないが、
此事は人の大事で打明けけるべきものでないから、
ぞ口へ出したことにはない、斯ふ云ふ譯だから、
探づね出して十分にはない、何しろ其れまでは、
他所へでも縁付けて遣らうといふ者へだ、
他人に咄さぬことだから、實は心前にも云はなかつたやうな譯
けで、喜藏、氣を直して呉れよ、心配して呉れた段は解じけな
い、爾いふ譯だから其方も探偵をして居る身の上、
在を能く探索して貰ひたい喜へへ……左様で御座いましたか

梅川忠兵衛

私にも何か大事な事があるだろと思ひました。夫程の事とは知れませんが、只一筋に失禮ばかりしました。眞平御免なすつて下さい。上那の事だから何も不思議だと思つたんです。へ、忠分かつたか。喜分りやした。只貴所が梅川に懸着たので家へ置いて両手に花を挿んで居るのかと思つて、意見ケ聞敷事を申したので、誠に相濟ませぬ。爾云ふ事で御座へすなら私も役目柄だ、必らず元祿七年七月二十三日、大和街道關峠で小兵衛を殺し、八十兩を奪た本人を尋ね出すやうに致します。忠、何か何分頼む。喜だ。且様、只今私の申した、其野郎にでれ助の一件は、何卒御忘れ下さるやうに……忠は、は、評さへ分れば別々に氣にかけれる事はないと。直に手をならして家内の者を呼んで酒肴を取出し、喜蔵に馳走して梅川にも逢はせて遣りました。

梅川忠兵衛

梅川は喜蔵に何分御願ひ申しますと言ふのは、言はず語らず偵をして居りますから願ひました。因で喜蔵はお琴にも逢ふて禮を申して歸りました。自分も役目の事で御座います。恰度六月の事で喜蔵は安治川迄用事が在りまして、此安治川口江戸屋と云ふ暖簾を掛けました。御座います。此江戸屋と申すは元山田喜蔵を便つて江戸から参りました。て、喜蔵の世話で安治川へ見世を出しました者で、よい盃に繁昌をして居ります。通り掛つたもので御座います。喜此間から一寸入りました。亭親分久しく御出が御座います。喜此間から一寸来よふと思つたが餘り暑いののでな。亭本統に暑く御座います。どうぞ此方へ御来下さいまし。喜大分繁昌で宜いな。亭おまさ

や親分がお出に成たよ 政おや、親分様お暑いに何所へお出に成ました、さア、是へ御出下さいまし、喜座敷が出来たな、亭へ二間出来ました、喜お前の家も此所へ来て、段々店が廣く成て繁昌をするので俺も世話をした甲斐がある、亭矢張り店なんぞは斯う居酒屋がたちにして置きませぬ、人が這入り馬う御座います、斯いつちや濟ませんが、宜いお客様ばかり取りますと大体の客足が遠くなり、腰かけで食るのもあり、二階がいよと云ふ方もありです、から、兩向きでなけりやア不可、喜おい何んだ向ふに居る人は、大層汚い姿じやねか、亭親分斯う云ふ譯で御座います、最前私の家の前を通り過つて、又歸つて来て一合飲まして呉れると言ふので、姿が汚いから断はる譯にも行かず鳥渡出して飲ませると、一合ですが、無いと見えて德利を振廻はして見たり、指を突込で嘗て見たり

種々な事をして居ります、喜ふうひ、妙な奴だな、餘程酒が好きなんだらう、亭左うで御座います、喜汚ねじやアねじか、亭汚ないッたッて何だつて私共じや彼のお客が這入居るばかりで大きな聲じや言へませんが、外の御客が皆逃て了うんです、喜夫は因るなア、と酒を飲ながら様子を見て居る。

第二十四席

山田の喜蔵が眠と先方を見て居ると、汚い姿の野郎も喜蔵の顔を見て居ました、が急に箸を下に置て、〇親分さん、真に面目次第も御座いません、此様な姿だから御挨拶もしまいと思ひやした、が、又さうでもね、御挨拶をしね、あの野郎不實な奴だと、思召と不可せんから鳥渡、喜お、見たやうだと思つたら兵衛、左様で御座います、喜どうしたまア、其様姿

梅川忠兵衛

をしやあがつて、久しく逢ねいなア、兵、いもう暫くお目に懸
りやせん、姉御は御異りはありやせんか、喜内のは變りは無が
どうしたんだ、兵へは在所へ行て疾ひやしてね、漸と斯地へ出
て來ても間が悪い事ばかりで、結局先アお貰ひ同様に成て了ひ
やした、喜夫は可憐想だな、其様な姿に成て居ても矢張り飲
いのか、兵、酒を見ちや堪りやせん、身体が悪いものですから飲
ね、おのが可いので御座います、爾は行きません、喜、飲み
か、兵、飲とうがす、どうも此處の内、酒は良い酒だが高う御座
います、一合の酒が此箱口に五つ半しか御座いません、情けね
んで、喜、愚痴を言つたつて仕方ね、おい仙吉や、此男は元
俺の所に居た兵藏と言ふ強飲家で面白い奴だつたが、身体が惡
くなつて彼様姿に成て了やアがつた、可哀想だから一杯飲まし
てやつて呉れ、仙、爾うで御座いますか、喜、なア兵藏手前好き

梅川忠兵衛

物を好み、馳走してやつたつて嫌へな物ヒや話らねから、兵
親分有難ふ御座へます、且、那一杯つけて御呉んなせね、仙、存
せせんものですからお構ひ申しませんでした、喜、こんな姿だも
の構はなくても可い、兵、藏何かさう云へ、兵、刺身がなくッちや
旨う御座いませんから、喜、江戸でさしみ大阪で作り身、酒飲の
好む物だ、刺身を作てやつてくんね、酒へは、喜、遠慮す
るな、兵、へはもう一つ梳盛をどうか、喜、酒家だな、刺身に梳盛
どくりやア、夫で宜いか、兵、口取物が御座へませんと、淋しう御
座へます、喜、可しく、兵、跡が梳盛に羨着、喜、うん可しく、兵、
照焼に酢の物に夫から……、喜、これ、少し待て、此野郎皆喰
のか、兵、こんな時でなければ喰ません、同じ御馳走になるのな
ら思ひ切て喰と思まして、喜、藏奴だなアさア、飲々々、喜、時
に是から手前何處へ行のだ、兵、何處といつて行く處は御座いま

梅川忠兵衛

せん 喜夫は可哀想に俺は此頃堺筋の龜屋且那の處へ出入をし
て、人足の廻しをして居るんだが、あゝ云ふ且那だから手前を
連れて行つて遣う 兵へは 喜何か庫へでも坐つて、荷物の檢
分かなんか、坐つて居て用のたりる事を願つて見てやらう 兵
有難ふ御座います、親分様御願ひ申します 喜夫にした所が其
姿では往かれねから今夜家へ泊つて翌日行く事にしやう 兵
へは、さうで御座いますか有難ふ御座います 喜支度をしる
兵支度たつても是だけで御座います 喜可しく 兵最早悉
皆酔ちまつたんで、は、は、お、お、お供いたしやしやふ、は
い 喜仙吉や此勘定をしておくれ、何に錢を取らなくちやア
不可ねは 仙濟みませんア 喜なに可いから兩方の勘定をし
てくれ、と勘定をいたしまして後を見るとき兵藏は二本杖を突初
めました 喜おい、手前二本杖か 兵へは腰が振たのが此頃

梅川忠兵衛

よふ、歩行るやうに成たのですから、杖が無くちや歩行やせ
ん 喜先へ立つて行け、二本杖と一緒に歩行のは降参だ 兵で
御座いますか…… 喜汚ねはなア 兵汚ねはつたつて仕方があ
りやせん、此儘で寝たり起たりしてゐるんですから、と二本杖で
兵藏はのそり、山田の喜藏は遙か離れて野郎の様子を
見ながら丁度安治川口を出で湊町の横堀通り迄來ると、向うか
ら三十四五の色淺黒い商人体に足指らへを、少々計りの荷物
を負つて菅笠を提げ、足早に参りました者があります、出合願
に兵藏が 兵やい、其處へ行くのは虎松じやねか、俺が
此様な姿になつてりやア、どうした位ゐな事を云つたつて可い
じやねか、おや、やい此畜生逃げるのか、此野郎待て、
と腰を掛けられて商人体をした男は、俄に笠を被つて足早に行
かうとする、兵藏も逐掛けやうとしたが十分に歩行ない 兵やい

梅川忠兵衛

な仲じやアねねか俺の姿を見て逃るの是不實だと云つたなア
兵へは喜今になつて口を押ねたつて仕方がねね兵さ、
様で御座います喜首の飛様な事と云ふのは何をしたんだ、
直に云つちまへ、若し隠すと仕方がねねから引叩くぞ、明ら
に斯う云ふ譯どい、つちまへ兵あ、大變な事を喋舌ちまつた
なア、ぢや親分お咄し致します、親分が探偵になつて居るは
知らなかつた、仕方がない、實は何でげす、あの男は私しが
龍屋をして居た時分相棒をして居た、元川口の生れで虎松と云
ふ者で御座います喜うむ、川口の生れで虎松、兵へは川添の
虎座はと申して居りやす、あれと二人で大和の郡山へ行つた事が
御座はやすんで喜うむ兵其歸りに大和街道關峠……喜な
に大和街道關峠と云ふは元祿七年七月二十三日ヒやねへか兵
是は親分能く御存じで御座います喜うむ

梅川忠兵衛

爾と云ふ者を殺して八十兩の金を取つた奴がある、手前仲間か
兵衛さんと云ふ事が分りました喜其時に人殺しをしたのは武
士か町人か但しやア手前等か兵私等では御座いません武士で
す喜面を知つて居るか兵もう斯うなつちやア隠しやせん、
親分其武士の面ア知つて居ます、へは實は斯う云ふ分で、其時
郡山から歸へるうと思ふと、武士が大坂迄歸るから降りて行か
ふと云ふので乗せて出ました、途中からお前さん大降りになつ
て嵐のよふに成たから、何うしよふと思ひました、乗せて仕舞
つたから詮方がねね、關峠迄來ると爺さんが燈火を貸て呉ると
云ふので燈火を貸しやした、其時に爺さんが懐から財布を落し
たのを武士が見やがつて、俄に駕籠を止め忘れ物をしたから
歸ると云つて駕籠賃や酒代を呉て行つた跡で、虎松と兩人で何ん

梅川忠兵衛

でも悪い事をするのだらうから、
て、それから何んでけす、駕籠を
に、殺して終て金を懐へ入れて居る
兵も、う仕方がね、且、何卒一杯飲
ど、云つたんで、喜二人で云つたの
見、居たかといつたから、居やした
仕方がない、是を遣ると云つて五兩
因で、たんかを切たんで、喜、なん
五兩や十兩の端下金を貰らひに來
る、駕籠屋だ、ぐす、しねへで三ッ
云つたんで、喜、ひ、手前達も細く
何んだと俺らは、只の駕籠屋、居や
丹波の兵、川、然の

梅川忠兵衛

虎松ださア出さなければ腕力で
ひどうした、兵、奴らは是が不足
不、足なら是をやると云つて長い
虎松の奴は、腰を抜かしちまやあ
私、事は其時、腰が抜かせんが、
な、し、事だ、兵、謝つたので、御座
た、御辨なすつて下さいと、喜、
な、ア、兵、謝つて、五兩貰らつて、
です、爾云ふ譯で、御座へます、
す、喜、爾か、其後、武士に會はね
確、か、天、滿、橋、だ、つ、け、で、見、掛、た、事、が、御、座、い、ま、す、
に、居、る、ん、だ、な、兵、大、阪、に、居、り、ま、す、喜、名、は、知、ら、ね、か、
知、り、ま、せ、ん、が、面、は、今、云、ふ、通、り、知、つ、て、居、り、ま、す、喜、手、前、が、面、を、知、

つて居りやア是から龜屋の旦那の所へ連れて行くとし其事に付て
……龜屋の旦那が探して居なざる事があるから手前且那のお供
をして歩行だけの手をいす喜一緒に往け兵へは喜手前二
本杖を隠しては歩行けぬか杖を突て居ますんで喜
は有ませんが大義なものですから杖を突て居ますんで喜
々歩行で緒に往け歩行けるじやアねか兵歩行けるので
すが種々にやつて見るんです喜喘着しやアがるなと直ぐに
丹波の兵藏と連れて龜屋忠兵衛の處へ参ります。

第二十六席

喜藏は兵藏を連れて龜屋へ参り、段々の話しを致しましたから
忠兵衛も大層に悦んで、早速當人にも約束をして本人さへ見出

して呉れば相當の禮をする、敵討と云ふ事は申しませんで兵
藏を頼んだ、兵藏も承知致しましたと云つたが何分身体が本統
でないから療治などを致し、飲ました見ると、宜い塩梅に杖
も離して歩行けるやうになり、故終市中を廻つて居るから結同
れて、自分は大坂三郷取締り、故終市中を廻つて居るから結同
探して歩行くには宜しい位、なもので、因で兵藏との約束には
あれで御座います、あの旦那と群を掛けて逃げられでもしては
ならんから、當人を見たら相圖に持つて居る手拭なり鼻紙なり
を振れば、取押へて一通り吟味をする、云ふ約束を致しました
ので、兵藏も油断なく忠兵衛の供を致して毎日のやうに出歩行
きました、扱探すと、なる見當りませんもので、處が一日天満
天神へ参詣を致し、年三十七八にも来ると向うから
草履取を一入供に連れまして、掛に、鳥居の所へ来ると向うから

梅川忠兵衛

あの位い合圖をして居るのに飛掛つて捉まへないので
圖をするとは兵今私の手扱を振つたしや御座いませんか
手扱を振つて居たがあの御方と咄しをして居る時に其傍でも
通たといふのか兵さうじやアありません今旦那と話をして居
た彼か元祿七年七月廿三日の一件で御座います忠はメッあ
のお方か兵夫は間違はありませせん先方じや私がか此様姿に成
て居るから覺が無いと見ゆません此方はちやんと覺へて居やす
裁の毛利大膳太夫様の大蔵屋敷留守役をして被居る荒川主
馬と云ふ方だ兵何川だか知ねへあの人から御座います忠
夫は兵藏見違ひだるう丁度昨年で有た長州から参る荷物の義
に付て大きに失策をして、事に據ると龜屋ばかりではない、八軒
の飛脚屋が潰れやうと云ふ位な大騒動があつた其時にあのお方

梅川忠兵

立派な武士が参りました、忠兵衛の姿を見ると立止まりまして
武藏屋へ、久しく参らんな忠、是は旦那様御無沙汰致しまして
て眞に恐入ります、些少御用が出ましたもので御座いますから
武藏屋でもあらうが来て呉れよ、種々話してもあるし、夫に基が
打掛に成て居るからあれをいつ形を付けて了はなければならん
侍ては居られん、は、何方へ参つた忠へは天神へ参詣に
参りましたので、武藏屋も是から天満宮へ参詣致す何も久々だ
一杯やろうかの忠、有難ふ存じます、今日、御勇を蒙ります
非來て呉れ、忠、長まりました参りますよふに致しますと挨拶
をして居る、後では兵藏が手扱をぐるぐと振廻して居る、其
に別れて武士は本社の方へ参りましたので、兵、旦那様何故貴所

梅川忠兵衛

が骨折で幸ひに隠便に治まつて、出入町人は荒川様の事を悪く
金ころか賞ないものは一人もない、あのお方が人殺しをするの
迷つてお出なさるからで、今は立派なお方になつたか知らねへ
が、四五年度の事で御座いますもの、あのお方だつて據ない入
用があつて小兵衛を殺して八十兩の金を取つたかも知れません
今の了簡と又其時の了簡とは了簡が違ひますせ、先ア〜兵
人達いじやありません、全くあれです、忠爾か……先ア〜兵
且歸るうと家へ歸つて山田の喜蔵に相談すると喜夫は且那
の仰しやる通り、私しも荒川の且那が其様な事をなさる氣遣ひ
はないと思ひますが、併し兵蔵の云通り人心と云ふものは昨日
と今日と變るもので御座いますから、事に據たら荒川の且那がお
遣りになつたかも知れません、夫に付いて兵蔵、何か証據はな

一哭

梅川忠兵衛

さか、身新うしてお呉んなせへ、何卒親分の手で私を蔵屋敷の
仲間に入れてお呉んなせへ、爾すれば荒川と云ふ人に近附きます
から、近附た時に元禄七年七月二十三日の晩に斯う云ふ事を致
したと云ふ書附を出す氣づかひはねが、何か証據になる物を
取上げて來ますから、忠是は宜い所へ氣がついた、喜蔵どうか
此者を蔵屋敷へ仲間に入れる様にしてお呉んな、喜夫は宜しう
御座います、蔵屋敷の事は部屋頭の又右衛門が居りますから、
又右衛門に話して仲間に入込みやア可ふ御座います兵蔵遣損
うな、兵屹度証據を掴んで参りやすと約束をして、直に大阪
長州蔵屋敷の部屋頭又右衛門と云ふて萬事の事を任されて居る
人の處へ喜蔵は頼みに行くと、何の雜作もなく兵蔵は蔵屋敷の
仲間になれました。

第二十七席

根仲間になつて見ると何時でも荒川主馬の處へ行れるかと思ふ
 と、身分が違ひますから中々逢へるものでは御座いません、早
 く逢ひたいと思つて居た其の中に、早や七月の末と云ふ事になり
 ました、一日主馬は庭へ出て頻りに下草などを見て居りまする
 と、左の方の方に生垣がありす、其垣根の間から面が出た主
 何だ其處へ顔を出したのは兵衛暫くで御座へます、主、誰だ
 兵衛且那暫く御目にかゝりませぬ、私で御座います、主、これく
 其んな所へ顔を出してはならん何の用が有つて其處へ顔を出し
 た、兵衛御立開の方へ参りますと御目に懸る譯に参りませぬから
 是にてお咄しを致します、私は丹波の兵衛で御座ります、主、な
 に、兵衛丹波の兵衛で御座ります、元祿七年七月廿三日の晩……

去これ勝にしる、秀七月廿三日大和の關峠で、且那が仕事を
 なすつた時の駕輿を擔いだ駕輿屋で御座へます、主、うむ、あの
 神の駕輿屋か、何も云ふなく、兵衛へ言ふなど被仰るなら申
 は致しません、疾から蔵屋敷へ参つて居りますので且那樣に御
 目にかゝつて一度お咄しなしてへと思つて居りましたぞ……
 主、拙者もあの時は拙ない入用に付いて殺生を致した、今更後
 悔をして仕方がない、其方へは相當の事をして遣はすから、
 此事は云つて呉れるな、兵衛、河でげす別に私に其様な事を見たか
 ら、來たんじや御座いませぬ、一寸お咄しだけ致して置きたいと斯
 う存じまして、主、宜しく、今小道をつかはすから待つて居る
 と、因で荒川主馬は立上り、手箱の中から取出した金子を紙に包
 んで自身に側へ参つて、主、ア持て参れ、兵衛有難ふ存じます
 主、何故其所から顔を出す、今度用があつたら臺所へ参つて、

梅川忠兵衛

せうか逢して呉れと申せば庭へ通して逢う、其時に何でも其方
から云へ、爾いふ垣根の間から顔なぞを出してはならん、又遣
はす之を持て行け、兵有難ふ存じます、二分か三分呉れたかと
思つて兵藏開いて見ると十兩遣入て居る、直に忠兵衛に咄しを
すれば何事もなかつたのだが、其處が下素の賤し、此奴宜い蓋
すだ、此蓋梅では二度や、三度は利ア、二十どか三十どか蓋つ
た金を引奪て、夫から後に親分へ知らせても遅くはねと考へた
から夫からといふ物は二三日置ては垣根の所へ來は願を出して
無心をするから、荒川主馬も五月蠅なりました一日庭へ通して
申には主兵藏貴様の上ふに爾度々來や困る、兵へ往ません
かい、御困なさりやア仕方がない、縁ない橋は渡れねと云
ふ比、御の通り、私も縁の無い處へ來るんじやア御座いません、
元祿の七年の……主これ、動ともすると元祿の七年と、夫

梅川忠兵衛

を貴様に云はれては困るといふのだ、兵云やしませんお前さん
煩せへと仰しやるなら……主先づ待て、斯うして三兩や五兩
の金をやつた分には身には付くまい遣嵩も無かるうから、今晩
其方へ百兩の金子を遣る、兵へッ百兩、本統で主併し今手元
に百兩の金子は無から、心齋橋筋の大坂屋太左衛門方迄行け
兵、あの米問屋の大坂屋で御座いますか、へ存じて居ります
主、あれへ今晩参つて百兩の金子を受取つて其方へ渡してやる
から、百兩の金子が手に遣入たら何卒三月や四月は來ないよ
にして呉れ、爾でない時には何時主馬の肩衣にかゝはるやうな
事が出來るかも知んで真に困るから、兵有難ふ存じます百兩か
呉んなさりやア三月や四月しやア御座いません、當分参りませ
んからどうか願ひます、主、今晩斯うしろ、其方は心齋橋筋の角
の茶屋へ参つて待つて居る、兵へい、主、拙者は夕景から参

梅川忠兵衛

つての、必らず大阪屋へ参れば百兩の金子は雑作も無く渡して
道はすから兵有難ふ存じます何卒一つ願ひます、さうすると
今夜中に金をお貰ひ申して此方には居りません、故郷の丹波
へ歸りますから主、爾して呉れば此方も幸ひだ」と書簡の中に
約束をして早速夕景に相成りますと、荒川主馬は兵藏を連れ
て、東屋敷を立出で心齋橋筋の大阪屋太左衛門と云ふ米問屋に参
りまして、暫く何か亭主と話をして居る、其間兵藏は近所の居
酒屋へ這入つて飲みながら待つて居りました、五ツ半時分にな
ると主馬が来て主、金子が出来たから渡して遣る、兵有難ふ
存じます主、居酒屋では話しもならんから同道致せ、兵へは
兵藏は謀られるとは知らず出て参ります歩行いて居る内に渡
すと思ふと渡しませぬ、兵、且、那、ぞ、金子を、主、今渡しして遣る
二兩三兩の金と違つて往來でも渡せぬ、百兩といふ金を渡すの

梅川忠兵衛

を人に見られると不可んから、人目にかゝらんよんに渡し遣は
す此方へ來ひと連れて來たのが、船の濱、空は真闇で星も少な
い、兵、且、那、何で御座います、此間迄は船で遊びに出る者があつて
賑やかで御座へした、最早此頃では、船島の濱にも人が申しま
せん、取分て今晩などは曇つて、せい、御座ぬや、主、此
所は景色がいゝ、此頃は淋しいな、兵、そんな事は構ひませぬ
が、何うか一つ、其百兩の所をね、主、よし、では渡すぞ、さ
ア百兩遣はすから請取れ、と二足ばかりやり過して置てぶつし
り、後から抜打に斬りつけた、兵藏はあつと逃よふとする處を飛
掛つて二太刀ばかり、斬付けましたから堪りませんがつくりそ
れへ倒れた、兵、こ、此様な……、事だ、入、ろ、うと思つた、あ
ッ、痛ひ……、人殺したア……、人殺だア、と止めを刺した荒川主馬、は
藏の顔をうんと蹴ながらさぶくと止めを刺した荒川主馬、は

つと息を吐いて四邊を見廻す機會にばらぐと駈けて来る者があ
りますから扱はと思ふ鼻ッ先〇御用だッ」と突然川主馬の
着て居る羽織の袖を押へた者がある。

第二十八席

眞先きに駈て來し黒い人影、南無三と思ふ間に御用だ、と袖を
掴むだ、續いて後より六七人駈け出して來る様子、主馬も二人
りヤ三人位いな斬拂ふ積りだが、何しろ對手は大勢なり殊に
は町奉行の捕力と見た、失策と袖を振り切つて逃さうとする、
機會に袖が断れて押へた者は後ろへ倒れました、袖を掴んだ
まゝ逃すなつと云つて起上り、其れ手廻りを皆それと追駈けま
した、荒川主馬は逃足早く跡踏をして其儘影は見ぬません。
扱主馬は藏屋敷へ逃歸り、留守居の事故夜中でも門限がありま

せんから其儘宅へ歸りましたが、何分教のある羽織の片袖を奪
られましたのですからあゝ困つた事をしたと悔むだが詮方がな
い、夜が明ると鍋島の濱に人殺しが有る殺され居る者は顔も何
もめちやくに成て居る、誰だらうと云つて却々の評判で、言
人が見に行きます、其中に御檢使も來ますし其れ、手配を致し
て居ります、丁度此日龜屋忠兵衛の家へ参りましたのが山田の
喜藏で、喜且那様今日は忠喜藏か、忠へい一寸且那此方へ、
御覽に入れる者が御座います、忠何んだへ、喜外では御座いま
せんが、長州の荒川主馬といふ方御紋所は何んで御座いま
す、忠異に事を聞な、荒川主馬殿の紋は細輪の内に入重楕だ
が、何んだ、喜且那探索に入れて置いた丹波の兵藏は、川主馬
に、昨晩殺弄れました、忠、やられたとは、喜、昨ばん三ッ石の五郎
藏が、鍋島の濱近傍を立廻ると云ふので手配りを致して居ります

すから 主はア左様か商賣用かの 忠左様で御座います 主何
しに参つた 忠外でも御座いませぬが、失禮ながら且那様は能
く夜遊びなどに御出ましになりますやうに存じますが、雨云ふ
時には能く御用心を成さいますと不可せん、實は昨晚
鍋島のは能く御用心を成さいますと不可せん、實は昨晚
殺された 忠へは、夫で殺した者の行衛が知れなひような知れ
て居るような譯で御座います 主ふうむ 忠就きましては斯様
な事を且那様に申上げては相済みませんが、十年一昔と申す
けれども今は五年が一昔、且那様も四五年前は何か御心の駒が
狂つても居らせられた事があるかど存じますが……世の
中と申すものは知れまいと思つても天道様は見通しど、能く町
人が申す事では萬々一の事が御座いますと貴方か一方では御
座いませぬ、御先祖様へ對しても御不幸に當り、従つて御主は

一頁

不忠にも當る事御武家方は是を御償しみなさらなければならん
様に心得ます、死ぬ時に死にませぬと死に勝る恥があるとか申
ますから、御覺悟をお忘れにならんやうに願ひたう存じます
主これ、蔽から林に龜屋忠兵衛、妙な事を云ふ、覺悟をし
ると云ふのは、忠人は何時何様事があるかも知れませぬから、
唯其御覺悟が專一で御座りませぬ存じますので、主左様か……
忠付ては是は思はず私しの手に入りませぬので、主左様か……
且那様は詰らん物と思召しませうが、差上げますから、御隨取
下さいまし、主は、折角の志ざし何を呉るか拜見をする」と云
つて帛紗包を開いて見れば、夜御取られた自分の片袖、はッど
ばかり、屹驚致した荒川主馬、暫時は語も御座いませぬ。

第二十九席

一頁

梅川忠兵衛

難義を救はん爲めに開帳で餘義なく人殺しをした程の荒川主馬
忠兵衛に意見をもされ證無の品を戻されたので、今が死ぬべき時
ど覺悟を極りなした、是は自分事として、天竺の寺町に歸すといふ寺
かりの遺物分なせを致さして、天竺の寺町に歸すといふ寺
へ出向せしした、是は自分事として、天竺の寺町に歸すといふ寺
も當りすから、明日は回向致して、天竺の寺町に歸すといふ寺
は願屋敷へ立歸り、徐に切腹といふ處で御座います然に天竺の
橋を通うとす時に逢た人は相澤八郎、荒川主馬とは口常懸
意の仲で御座いますから、兎も角も途中で話しも出来んからと
相澤は無理に荒川を勧めて連込みました、相澤は種々と尋ねる
も根つから荒川が娯しまぬ様子です、相澤は種々と尋ねる
尋ねられて見れば荒川も返辭をせぬ譯に行きません、殊に内々
開帳の事は承知致して居る相澤の事です、實は斯々の次第

梅川忠兵衛

だど自分の覺悟を唱せました、天竺興力の相澤八郎は式より忠
兵衛には重なる遺恨のある奴です、相澤は尋證になる物は尊公の手
へ返した位の忠兵衛、彼れさへ殺して了へば、別段に尊公の舊
悪を知り者は一人も無い、夫よりは拙者が助太刀を致すから今
晩彼が歸りを渡邊橋邊に待構へて斬てお丁ひなさい、及ばすな
がら相澤八郎が御助太刀を致す、長い浮世に短い命、切腹をな
さらうと云ふは近頃御短氣では御座らんか、と段々云はれて見
ると、誰しも死にたいものはありません、終には荒川主馬も相
澤の爲めに説付られて、今迄の決心はなくなりましたのを見へ
て、主ならば相澤氏助太刀をして下さるか、相いかに承知
致したと二人が料理屋にて約束を致し、茲で服装等を揃らへ渡
邊橋迄来て待て居る。神ならぬ身の忠兵衛は尾ヶ崎の大渡
兵衛方へ参り、百兩餘の金を請取りまして歸つて来る、丁度渡

提燈の燈火で足元を照らしながら来掛りますと、橋詰の此方に
提燈の燈火で足元を照らしながら来掛りますと、橋詰の此方に
提燈の燈火で足元を照らしながら来掛りますと、橋詰の此方に
提燈の燈火で足元を照らしながら来掛りますと、橋詰の此方に
提燈の燈火で足元を照らしながら来掛りますと、橋詰の此方に
提燈の燈火で足元を照らしながら来掛りますと、橋詰の此方に
提燈の燈火で足元を照らしながら来掛りますと、橋詰の此方に
提燈の燈火で足元を照らしながら来掛りますと、橋詰の此方に
提燈の燈火で足元を照らしながら来掛りますと、橋詰の此方に
提燈の燈火で足元を照らしながら来掛りますと、橋詰の此方に

倒れる所を飛掛りて暗天から斬り付けましたから其儘にして荒
川主馬は、真二つに成つて倒れました、是を物影から見えて居ま
した相澤八郎、敵はぬ所と心得まして、其儘跡眩まして逃失せ
ました。
後、忠兵衛は死骸を足で確りと踏押しへ踏蹴りましたなり、忠
金を持て居る處を知つて強盗の仕業であるか、夫とも遺恨在て
の曲者か、一入残したのが残念、何奴であるか、と足を上げて
頻りに死骸を踏んで居ります、所へ橋の彼方から大きな提燈を
点けて、蔵屋敷の仲間が酒の機嫌と見かねて鼻歌唄ひながら遣て
来たが、是は提燈の印で分ります、忠、其處へ来たのは定八ヒヤ
アないか、仲へ誰方でげす、いや、龜屋の旦那ですか、忠、うむ

第三十席

梅川忠兵衛

何處へ行く 仲へは、荒川様の行衛が知れないのに、急に御用
があるよ云ふので夜中探しに出ました、荒川様が遊ばに出
ると困ります、忠今蔵屋敷にお出なさらんか、仲お在になりま
せん、夕方出たつさりて、扱は菩提所へでもお往に成て御切腹
を成すつたかど、腹の中で思ひました忠兵衛、仲何をしてお在
なさる 忠今な斯ういふ譯で、仲いやア且那双物を提てお
在なさいますな…… 忠決して心配をするな、己を斬ろうとし
た奴があるから此場で斬り捨たのだ、提灯を一寸貸して呉れ
仲且那飛だ事をなささいましたね、やア其處に倒れて居るのは
荒川様で、忠兵衛は燈火で死骸の様子を見ますと、こは如何に
荒川主馬の死骸ですから一時は驚きもしたか實にひらくと腹
が立つた、忠彼程私が見を加へ武士の一分を立てさせやうと
思ふに、同類を語つて先へ廻り、我を殺す氣になつたとは……

一六

梅川忠兵衛

と暫く主馬の死骸を見詰めて居たが、武士にあるまじき事、斯
いふ人ど知つたなら證據となる片袖を返すのではなかつた、あ
いふ譯で荒川主馬を殺したに相違ないから、貴様は蔵屋敷へ歸
つて重役へ届ける、私は今から自訴致す、いや之に付ては様々
の事がある故、早く歸つて此の事を届ける、仲承知致しました
忠兵衛は刀の血を拭つて鞘に納め、預つて居る金がありませんか
ら一旦堺筋の家へ歸り、門を叩くと家にはお琴初め梅川も寝ず
に待て居りました、門を開て這入て来た姿を見ると血だらけ
吃驚りしたのしなないのでありませぬ、其時に云々斯いふ譯とお
琴に咄し、又梅川に荒川を切殺したのは斯云ふ譯と次第を話し
た、驚いたのは梅川で、扱は敵討をして下すつたかと悦べども
また人殺しの罪を得た身体、百兩の金子を家へ置て忠兵衛は其

一七

梅川忠兵衛

又、間の不可、川主馬は敵に相違ない事、思ふて證に成べき物を返し、
一、人の駒井重左衛門は此二人の兄弟同様の者故、
荒川主馬は敵に相違ない事、思ふて證に成べき物を返し、
白砂へ當人を引入れ、段々調べて見ると、元祿七年の事件から
座にいたのが駒井重左衛門、川九郎兵衛といふ二人の與力で御
りましたの、申出た、時に西の奉行所には其夜宿直を致して居
致したい、と申出た、時に西の奉行所には其夜宿直を致して居
参つて、忠人殺しを致して参いた龜屋忠兵衛、早速御繩を頂戴
へ出ましたのが、度々明と云ふ時分、御座います、御門へ
見、心止めやうにも止められませんが、因で忠兵衛は奉行所
儘奉行所へ自訴すると云ふので、お琴梅川の二人は宛ら夢に夢
見、心止めやうにも止められませんが、因で忠兵衛は奉行所
へ出ましたのが、度々明と云ふ時分、御座います、御門へ
参つて、忠人殺しを致して参いた龜屋忠兵衛、早速御繩を頂戴
致したい、と申出た、時に西の奉行所には其夜宿直を致して居
りましたの、申出た、時に西の奉行所には其夜宿直を致して居
座にいたのが駒井重左衛門、川九郎兵衛といふ二人の與力で御
白砂へ當人を引入れ、段々調べて見ると、元祿七年の事件から
荒川主馬は敵に相違ない事、思ふて證に成べき物を返し、
又、間の不可、川主馬は敵に相違ない事、思ふて證に成べき物を返し、

梅川忠兵衛

隙てから忠兵衛へ遺恨を抱ひて居る事は知つて居ります、
持て来て内々相澤から其夜の中に前夜の有様とはがらりと様
すから、翌日の調へとなり、其方、長州家留守居、荒川主馬
が、遠います、皆、龜屋忠兵衛、其方、長州家留守居、荒川主馬
義、邊、橋、の、橋、詰、に、於、て、斬、り、殺、し、百、兩、の、金、を、奪、ひ、取、り、
渡、邊、橋、の、橋、詰、に、於、て、斬、り、殺、し、百、兩、の、金、を、奪、ひ、取、り、
と云ふ事を口實に致して自訴致して罪を免れやうと云ふ心、
相違あるまい、第一、其方の腰に致して居る其細輪の中に八重桔梗
の、高、蔭、繪、の、印、籠、夫、は、荒、川、主、馬、の、物、を、其、方、奪、ひ、取、つ、た、に、相、違、な
い、真、直、に、白、狀、致、せ、忠、兵、衛、大、い、に、立、腹、致、し、忠、私、は、別、段、に、荒
川主馬の印籠一つたりとも盗むだなど、云ふ事は毛頭覺へ御座
りません、と貰ひ受けたりとも盗むだなど、云ふ事は毛頭覺へ御座
し居ります、と貰ひ受けたりとも盗むだなど、云ふ事は毛頭覺へ御座

梅川忠兵衛

叱り遊ばし、人を殺し盗賊の大罪のある者を漫りに牢問拷問に掛けるといふ事は、白状する迄は心を通し置かんければならぬ。致しませし事、御自身一通吟味に相成たが、何分にも忠兵衛の川主馬の印籠を忠兵衛が所持して居りましたので、又荒るべき片袖は戻して遣りました故に云分が立たないの、強盗と云ふ証に近ふ御座います、河内守様も大きにお困りで、兎も角も吟味中に入牢と云ふ事になりました、御奉行の御掛りです。牢に這入る事に成りましたが、御奉行の御掛りです。當を戴き大事に成りましたが、御奉行の御掛りです。で御座いますから、夫程樂といふ程ではない、此一件に付き、屋の本妻お琴よりは嘆願書が出ます、鴻の池から嘆願書が

梅川忠兵衛

相違ないから白状をさせると云ふので下役人に申付け、拷問に掛ける事になりました、自訴致します位と云ひ、殊に覺へのない身です、忠兵衛は白状する氣遣ひはありませぬ、殊に覺へた人殺し盗賊と云はれては末代迄の恥辱故、何と云い開きを併した、併し自訴した者を此様な扱ひをするのは、何か譯のあした、事に相違なるとは思ふたのが、豈夫無實の罪に落すのとは心付る事、此方では入替り立替り責て責通し、次第に依つた、早稲の如くになりました。御奉行の取に這入りました、然る處、其日の四つ頃になりまして、御奉行の取に這入りました、から松野河内守殿大きにお驚き遊ばし、駒井皆川兩名を悉く御

第三十一席

梅川忠兵衛

出るのめで、さうか忠兵衛を無罪に致したいと奔走致す、取分け
て梅ヶ辻の喜藏は手の中、の珠を取られ、ましたよふな心持がして
役柄とは申ながら、御奉行所へ日々参りまして、松野河内守様へ
追つては、何卒、御屋忠兵衛の代りに私しを入半下し置かれます
やふと願ひ出て居るけれど、半代りを入る分には参りませ
ん、或日河内守様御自宅へ喜藏を御招きに入成つたから、喜藏
は取物も取あへず御屋敷へ出向ます、御通しに相成た奥坐
敷近侍の取あへず御屋敷へ出向ます、御通しに相成た奥坐
付て其方が、折角、敵討をしたの、喜藏様の前で御座ります、
困つた事が、出来た、配であらう、喜藏様の前で御座ります、
座すから、折角、敵討をしたの、喜藏様の前で御座ります、
も死切ないで、御座り、敵討をしたの、喜藏様の前で御座ります、
長州藏屋敷留守居、彼の荒川主馬の跡役を致居るは、願部伊太夫

梅川忠兵衛

と申す者再三奉行所へ参りて、喜へば……何しに参たんで御座
ます、河此度の事が長門の國表へ知たものと見へ家老桂能登と
云、人が大坂へ出張て、其名代として伊太夫参つて申すには、何
卒、忠兵衛を引渡して呉れ長州萩の國表へ同道致して吟味致した
い、家人を殺されて見れば是非忠兵衛を申請けねばならぬと申し
て居る、喜へば、夫は、野河内守役目に依つて取調べを致する
し、上途に願ひあるが、長州家へ引渡す譯には相成らんで、確と
以上、牛途にして、長州家へ引渡す譯には相成らんで、確と
を致した、喜有難ふ存じます、長州へ連れて行かれ、ば、
那は首を斬れるか、磔刑になるか、關の山で御座います、何卒お
渡しになりませんやうに願ひます、河、夫は此方でも其通りであ
るが、事に依るとあ、梅は、江、戸、表、長、州、上、屋、敷、留、守、居、ら、
江、戸、へ、願、ひ、ま、す、河、江、戸、表、長、州、上、屋、敷、留、守、居、ら、
江、戸、へ、願、ひ、ま、す、河、江、戸、表、長、州、上、屋、敷、留、守、居、ら、

ました、山田の喜藏察しましたから能々心配願に喜へば、何
か爾云ふ事でもあれば宜しう御座います、が併し……恐入りま
して御座います、種々又御内意を下さいまして有難ふ存じます
何れまた……」と喜藏は河内守様の御前を出まして梅ヶ辻へ歸
つて來ました。

第三十二席

喜藏は熟々考へますると、河内守様の思召では、破半をさせる
と被仰のに違ひない、扱破半をなすには何したら可からうと、
思案に思案を凝ししますと其中には何だか心持が悪くなつて來ま
したから喜お時や今手紙を書くから前天満の兄貴の所へ持
つて返事を聴いて來て呉んな、外の者をやると不可ねへから、
兄貴が居なかつたら歸りを待つて居て呉んな、時はい喜早く

往て來い」と手紙を書いて女房のお時に命けたのは差當ての用事
と見ゆる、お時は手紙を持って出て往く隙には若い者が二三人
喜これ若へば喜手前達に云つて置くが、俺は少し考へる
事があるから何だせ誰れが來ても家に居りますと云ふ事はなら
ねへぞ、若へば長りとした、親分は何處へ行きなすつたと聞た
ら、播州無宿の三ッ石の五郎藏を召捕方で、播州路へ出張つて
居りますから、何日歸るか御用先で分りませんと申して置きま
せう、喜斯やつて居る事を誰にも云ふな、若へば宜し御座い
ます、家の者へ命けて自分には奥へ行き、座敷へ這入つて手酌で
酒を飲みながらどうしたもんたるう困つた事が出來た、どう云
ふ事にしたら宜からうかど類りに考へて居る、子分の者は○
は、おい、何だか知らねへが、此二十日餘り家の親分は考へ事
ばかりして居るな、△何か出來たんだらう、○さうよ、○

梅川忠兵衛

旦那が召捕になつた以來は碌に飯も食はねへ
△何しろ大變な
事だなア」と話をして居る處へ、羽織袴深
鞋大小さして這入て来た一人の武士武頼む
來なさいまし武山田の喜藏の宅は此方か
○へ左様で御座います
○へ左様で御座います
武時
ではない、在宅かと云ふのだ
○左様で御座います、おい難か
来て呉れ、武いやさ在宅かと申のだ
△夫が何で御座います
飯を食ました武誰が其様な事を聞た、在宅かと申すのだ、分
らん奴ぢや、喜藏は家に居るかど申すのだ
○へは、居りませ
ん武居ない△へは武何處に参つた
△へん、播州無宿
の三ッ石の五郎藏を召捕方で御座いますして、播州路へ出張つて
居ります、御用先の事御座いますから何日歸りますと云ふ事
は分りませせん、御氣の毒様で武ふうむ播州無宿の三ッ石の五

一六

梅川忠兵衛

旦那を召捕方に向た、あゝさうか五郎藏は何した御手になつた
か△へは左様で御座います、五郎藏は一日播州兵庫で召し
捕りました武あゝ兵庫で召捕になつたか
○私が彼地へ出張
つて居りました捕親で御座います、私が召捕ました武ふうむ
貴様が、貴様は喜藏の子分何と云ふ
○四ッ橋の又右衛門と
申します武四ッ橋の又右衛門貴様が三ッ石の五郎藏を召捕つ
たか又私が召捕りました、親分は取調心跡片附で彼地へ殘つ
て居ります武あはゝゝゝやい手前は三ッ石の五郎藏を知
らねへか又知らねへ事は御座いませせん、私が召捕たので武
馬鹿を云へ、三ッ石の五郎藏と云ふのは俺だ又へ、三ッ
が三ッ石の五郎藏だ人相書があるだらう、面を見ろ」と被つて
居た編笠を拂つてぬくくり面を出したのを四ッ橋の又右衛門が
見ると人相書の通りだ又へは……五嘘ばかり吐きやアがつ

一七

て、汝等に召捕られる様な者じやねへ、奥へ往つて爾云へ、な
に居ねへ事があるものか、喜藏は居るのだ、奥へ行て爾云へ、
山田の喜藏の身体へ箆を附て遣るうと思つて三ッ石の五郎藏が
来たど、早く云つて来い、まごん、しやアがるな、又へは、大
變な奴が来やがつたな親分、喜来たな、又へは、今大勢で咄し
をして居る處へ、笠を被つた立派な武士が来ました、親分はど
云ふから三ッ石の五郎藏召捕方の爲播州へ行て居ります故、留
守だど云ひました、喜夫でい、ヒやへはか、又、さうして五郎藏
を召捕たかど云ひますから、私が口が滑つて此間兵庫で召捕り
ましたと云つたんで、喜、嘘、斗り吐きやアがる、それからさうし
た、又、爾したら笑やアがつて、手前は三ッ石の五郎藏を知らね
へかど云ふから、知つて居ると申しましたら、知つて居るなら
面を見ろと笠を取つたから見ますと三ッ石の五郎藏で御座いま

す、喜な五郎藏が来た、又へは大きな事を云ひますせ、山田
の喜藏の身体へ箆を付てやりに来たから、喜藏に此處へ出る、
居ない事は無い、奥で酒を飲んでるだらうと云つたんで、喜
喜藏へ箆を付けるとは生意氣な事を吐しやアがる、併し野郎も
天命を知つて俺の家へ来て細に掛つて行かうと云ふのか、可し
く、と十手捕細を携へて上り端へ来て見ると三ッ石の五郎藏は
悠然と腰を掛けて居る。

第三十三席

十手捕細を携へて夫に出で参つた山田の喜藏は、喜、五郎藏、最
早天命を知つて喜藏の家へ来たのか、サア俺が縛つてやるから
腕を廻せ、五、あは、ム、ム、ム、騒ぐな喜藏、奴に咄しをした通り
手前の身体に箆を附てやるうと思つて来たんだ、喜、なに、五、大

梅川忠兵衛

一晩牢へ泊りに行つて、牢破りをして龜屋の旦那を助けてやる
んだ喜ぶうひ、夫ヒヤア天命を知つてお處刑を請ふ氣か、五
御處刑に附んじやアねへ一晩泊りに往くんだ喜、一晩泊りか、
親類にでも行よんだ、五ア手前の身体へ宿を付けるのは此處
だ、俺を縛つて往けば手前は幾何か宜かろう、喜藏神妙にして
繩を掛ろ、其れではあべこべだ、因で山田の喜藏、三ッ石の五郎
藏の志を感心致して手當を致し、松野河内守殿へ差出し、
切奉行所にて一應御調がある、斯様な大悪人故なかく、犯し
た罪は隠すやうな事はしませんが、皆白状を致します、河内守様
は内々喜藏からの相圖がありませぬ、吟味申入半と云ふの
で松屋町南の三番の牢へ入りました、外牢へ入つたのでは忠兵衛
を助ける器械になりませぬ、御牢内の事は精しく申上度う御座
います、生憎手前未だ這入つた事が御座いませぬから存じま

梅川忠兵衛

きな辭をするな、外ヒヤねへが龜屋忠兵衛が召捕に成て居る中
は、三度飯も録々食すに手前が心配をして居るといふ事を
開たから、俺は手前を助けたんだ、と云ふ譯は三年後掛の
演で忠兵衛さんに助けられた覺がある、五郎藏だ所、今度の一
件は手安いようだが、敵討をした忠兵衛を人殺し盗賊だ、云ふ
事はして居るんだから容易じやねへ、是は必然天満與力の中に
誰れか忠兵衛を憎んで居る者があつた、違へね、夫に長州から
賞に來てゐるんだから、松屋町の牢に這入てる中は宜いが、
最早此頃ヒヤ江戸から御下札の來た時分だ、爾すりや幾ら名奉行
の松野様でも、引渡さの了簡で押へて置く事は出来ね、否でも
應でも長州へ引渡さの了簡で押へて置く事は出来ね、否でも
へ、見る日になりやア龜屋の旦那は磯刑にされるかも知れやしね、
夫より日なりやア龜屋の旦那は磯刑にされるかも知れやしね、
今度

梅川忠兵衛

せんが、同業者が辯じまするところで見ますと、何か隅の隅に居たの、金比羅下だのと申しまするものがありません、併し此の様なは一旦這入つて来たもので無ければ分りません、江戸表御牢内でも大阪の牢内でも知らん方が宜敷い御座ります、三番の牢の名主を致して居りまに牢名主と云ふ者があります、是は三ッ石の五郎藏の弟分ですのが飛騨の七五郎と申す者で、御座います、今御戸前口を潜りつて来ると、七五郎は早くも見て七、やア兄貴じやアねへか、五、やア七五郎手前が茲に居ると云ふ事を聞いて實は少し頼みがあつて来たんだ、大さな聲をしてくんせへ、七、何卒御役附此人は俺が兄弟分だ、極板一枚を取付けてくんなせへ、七、そんな悪黨でも御戸前口を潜ります時には極板と申しまして、板で打れますものださうで、併し牢名主の

梅川忠兵衛

音葉がかゝると別段打は致しません、一疊づゝ下つて呉と牢名主の七五郎がいふので、各々疊を下る、最も牢の中で疊の上で居りますのは何れ首の無い奴で、七、其所に居るのが龜屋忠兵衛だ、忠兵衛と云ふ人は何處に居る、七、其所に居るのが龜屋忠兵衛だ、兵衛、是も御奉行の御聲懸りと云ふので疊を二疊敷まして、其上に乗つて居りましたが、大阪三郷取締りなかく道徳家と言われた人も今日は詮方がなひ、呼捨にされる、七、一寸來な、五、是は忠兵衛さんか前さんの方じやア御存知はありやすめへ、私しは丁度三年後に堺の濱でお前さんに助けて貰つた播州無宿の五郎藏と云ふ者で、今度お前さんの一件は高が妾のことで、お前は言ながら梅川の為には親の敵、夫が却つて人を殺し盗賊の罪に陥つて御牢内で苦むとは實に氣の毒な事で、夫ばかりじやア

ね、松野河内守殿が今度の一件に付ては何な心配なすつて
居るか知れねん、と、言ものは長州から願を上げて、江戸
屋敷の月番若年寄水野美作守殿から御下札○出た、就ちやア長
州家からの願の通り、お前さんを助けようと思召ても、大阪に居
れば、幾何河内守様がお前さんを助けようと思召ても、大阪に居
た分には何うにも詮方がね、夫より一層牢破りをして半年で
も一年でも姿を隠して居る内に荒川主馬が盗賊に相違ない、小
兵衛を殺した者に相違ないと云ふ證人を探し出して、證據を以
て願ひさへすれば、破牢をした女の罪で事が済みやす夫故と
か助けたいと思つて私しは此處へ来たんだ、之に就ちやア梅ヶ
辻の喜藏が幾何位心配して居るか知れやアしね、ね、龜屋の
旦那、鶴くお考へて御覽なせ、私しは今夜此處へゆつくり寐て
つて一晩泊りでお救ひ申しに来たんで、今夜此處へゆつくり寐て

二六

明日の晩は此牢を叩き壊して御助け申すから安心して御在なせ
へ、七五郎手前も然うなりや何だ、片棒擔がね、か、久しぶり
で、斐斐の風に吹かれるのも妙なもんだせ。

第三十四席

三ッ石の五郎藏が破牢の相談に飛驒の七五郎は思案をするまで
もありません、七、然上、俺も久敷く斐斐を見ねへから、遠から
考へて居たんだ、何日か何時迄斯うやつて這入つて居た處が詮
様がねへな、それじゃア一緒にやらかさう、五、じゃア爾しろ龜
屋さんも、其積りで、忠有難ふ存じますが、此上に破牢なぞを
致しましては、恐入りますから……五、なに恐入るなんてお前さ
ん、其様な事を愚圖くして居ると、却て松野河内守様の肩衣に
係はる、夫より一旦牢を破つて、荒川が人殺し盗賊だてへ證

二六

梅川忠兵衛

見たりやア、然ふ思へ、殺す云ふのは、殺すに片ツ端から、
外への罪人に取つて此上ないから、覺悟をし、半内にて、
聞へませんと、思つたが御奉行の松野河内守様が、却て御難義を成
ては濟なひと思つたが、御奉行の松野河内守様が、却て御難義を成
さる様なき事にあつては、元禄十一年九月の十七日、晝程から降
り出された秋雨に、風さへ加はつて、物凄く有様、是幸ひと飛驒の
七五郎三ツ石の五郎藏、半破り、度々致して居り、幸ひと飛驒の
も能存して居り、結局、雪隠の傍に柱を抜いて、半を抜け出し、
二丈の高も乗り越へたが、忠兵衛は、足も地に着させん位、夫を

梅川忠兵衛

披露を探し出した上、何とでもするが可い、じや御座いませんか、
なア七五郎、七然うだ、先ア、忠兵衛さん、心配しないで、お出
なせへ、私等は、半破り、商買の様に、居る者だから、左様に、
様な牢の、ツヤ、二ツ叩き、壊すのは、造作もねへん、柄を外して、
て安んず、なさい、實は、兄貴、此間から詰、三番目の柄を、
たから、出ようと思へば、直に出られる、ちやんと下拵へは、
て居るんだ、此話と、云ふのは、雪隠の事で、其側には、ありませぬ、
申すのは、周囲の、嚴重に出、来て居ります、抗で、御座います、
柱を、振返つた、大勢の罪人は、吃驚して、互ひに顔を見て居る様子、
に居り、返つた、七、これ、野郎共、今、梅川の
七五郎、相談をしたんだ、立上つた、七、これ、野郎共、今、梅川の
此兄弟、相談をしたんだ、立上つた、七、これ、野郎共、今、梅川の
の、か、〇へ、七、聞いた、と、半破りの、咄し、手前達に、聞かれて

梅川忠兵衛

お前等に頭を下げると云ふのも時と時節、今後何か俺の身分に叶つた事があつたら……五いやそんな事は云はねでもお前の了簡は知れて居る、さア七五郎往うじやねへか龜屋さん又御目に憑る事もありやせう、随分御機嫌宜しう忠何から何迄種々有難ふ存じます、五何んの禮なんぞ……兎も角も喜藏、早く支度をしねど何だせ折角此處を出ても、此先捕つたら詮方がねへ早く行さねへ喜、そんなら又逢はう五、お前も随分氣を付けな、と三ツ石の五郎藏と飛騨の七五郎は別れた、了簡は居た、赤合羽を脱いで着せ掛け飯笠を被せて喜、自分も此處の周囲を通る間歩の骨が折れませうが、私と一且、那の火の用心、と斯云つて御歩さなさい、私は何が無くても顔が看板だからと、都合せて居る其内に最早内柵の方では半破

梅川忠兵衛

五郎藏が脊負ふやうにして出して呉れ、園の外へ出ました時は夜の彼れ是れ九ツ頃、するど向ふの方から火の用心、と云ふ聲が聞ゆるから、南無三失策た、又此所で人殺し殺生をしにやアならねへかど、三ツ石の五郎藏が支度をすると、飛騨の七五郎も詮方がねへ、見つかつたら百年目だ遣つて了へど其場へ寄らうとする、〇五郎藏じやねへか、五郎は手前は喜藏か、つて居る處だ、喜藏だ、此方へ来て牢内番人の太左衛門に頼んで廻つて居る處だ、五、夫りや宜い處へ氣が付だ、さア約束通り忠兵衛さんを引き出すよ、喜其奴ア有難い氣が付だ、且那無是迄の間お辛う御座ねやしたらう、御心中お察し申ます、五喜藏此處で其様な事を愚圖く言ちや仕様がね、目付ると面倒だ俺達はお前に迷つて忠兵衛さんをして渡して了へば用のない身体、又何處で逢か知れねへ、喜藏に何も五郎藏有難かつた探偵の喜藏が大泥棒の

梅川忠兵衛

座と云ふ物は山田の喜蔵の内も餘程殿しい探索で御座いました
が、十日十五日と立ちますると大きに入出入も少くなりました
喜お時や、あゝ旨く往つたなア時本統に先ア此間の様子
やア何ふなるかと思つたよ喜先アく是で少しは宜い、何で
も且那は二人と一緒には播州の方へ行つたとの評判がたつたから
もう那、就ちや一寸俺は天満の貴兄の所へ往つて来るが、事
に依ると今夜等は御本妻のお琴さんが来るか梅川さんか来るか
大抵も来なすつた時に、さうでもねへと思つて来ねへのだ、今夜に
者だから出入りをしてはならねへと思つて来ねへのだ、今夜に
も来なすつた時に、さうでもねへと思つて来ねへのだ、今夜に
の居る事を云つちやアならねへぞ時そりやお前さん大丈夫だ
よ喜大丈夫じゃねへちやんと断はつて置く、逢して上げるの
は宜いやうだが、今此處で逢せて上げるに却て夫が爲りに且那

梅川忠兵衛

半内で苦んで、漸く夫を出た甲斐もなく又斯云ふ處へ御連れ申
しまして済みませんが、是れも何卒時代時節とお諦めなさいま
して忠喜蔵段々の親切は唇けない、何分共に宜しく頼む喜
へお承知致しましたと格子を御した上へ疊を敷いて知れないよ
うに致した、さア明る日に成りますと、三ッ石の五郎藏飛驒の
七五郎龜屋忠兵衛三人が破牢をしたと云ふので、其探索の殿し
い事と云ふものは一通りなりました、取分て喜蔵の所へ顔の
知れた者はさうでもないが、見かけぬ奴が頻りに出入を致しま
す、喜蔵も中々業者ですから、態と開て見せるよふに致して居
ります、二三日様子を見たので、もう此梅では大丈夫と夜更
けて人の来いな時分に疊を上げ格子を取つて忠兵衛を出し休
を致させたり、是迄の次第萬事の物語りをすると云ふ風で、
の明け方には又床下へ入れて了ふから少しも知れませんが、其當

梅川忠兵衛

の罪を重くするやうなものだ、屹と断はつて置くせ 時私した
つて其様に心配する事はありやアしないよ女でこそあれ何うか
旦那様をと思つて居る位だから何も家の事ア苦勞にしないで、
用が済んだら早く歸つて来て下さいよ 喜用の済次第直に歸る、
俺の留守に若者が来ても成たけ奥へ通さねへよふにして、大抵
ならば親分が留守だと云つて歸して仕舞へよ 時大丈夫ですよ
喜蔵は女房のお時に吩咐て天満の兄貴と云ふは勘五郎と申しま
す 俠客で其方へ参りました、跡に残つたお時は其處等を形づけ
て居ると、彼是灯を点さうかと夕暮 ○御免下さい、少し開け
て下さいな」と云ふのは女の聲はいとお時は出て見ると、是は
また噂をすれば影で、龜屋忠兵衛の本妻鴻の池善右衛門さんの
娘お琴で御座いますから、時おや御新造様被入りましたア御上
り下さいますし、あの拙夫に御逢ひなさりはなさいませんか 琴

梅川忠兵衛

いゝに喜蔵には逢ひません何處へ行きました 時天満の勘五郎
さんの處へ参りました 琴然うですか、あの誰も居りませんの
か 時へ私しばかりで御座います 琴さう、それでは幸ひ、
就てはお時や、此度は種々心配をさせて眞に氣の毒で、に來
やうと思つて居たが、餘り其當座來ると夫が爲に事が知れては
なるまいと思つてね、今迄來ずに辛抱して居ましたの、今夜は
幸ひ誰も居ないのならあの何卒旦那様の御在なされる處へ案内を
して、一目逢して下さいな、種々御目に掛つてお咄し申して置
たい事もあり、御禮を申した事もあり、御禮を申したい事も
ありますから、時いな、彼の御新造様、何で御座いますよあの
……旦那様は家などに御出なさる氣づかいはあの……あの……
と」お時は胸に釘で御座います。
さてこれより忠兵衛其他の落着は如何なることに相成りませ

梅川忠兵衛

うか、まだくお話しも、
梅川忠兵衛は茲を以ちまして一
先づ終局といたしまして、後編
いたしますから、前編後編引合
願ひ置きます)

二天

明治三十五年五月七日印刷
明治三十五年五月十二日發行



京都市蛸薬師鳥丸東入二百九十九番戸

吉田直次郎

京都市鉄屋町通二條上ル布袋屋町二番戸

細井熊七

京都市鉄屋町通二條上ル布袋屋町二番戸

至誠堂印刷部

京都市蛸薬師鳥丸東入

至誠堂

京都市日本橋區住吉町

至誠堂

同

發賣元

誠

堂

新刊小説

●中山白峯著
●小説新演劇 定價四拾錢 郵稅六錢

●桃水著
●小説小猿 定價四拾錢 郵稅六錢

●桃水著
●小説雪と炭 定價四拾錢 郵稅六錢

●松華庵著
●小説五月晴 定價四拾錢 郵稅六錢

●桃水著
●小説雪と炭後編 定價四拾錢 郵稅六錢

●異名分類抄
●和歌俳句資料 全一冊 定價四拾五錢

●本書は作詩作歌に適當なる字典にして俗に獨案内の如き良書也

●全國力士集 全一冊 實價貳拾錢 郵稅四錢
●但クローズ製美麗なる横本なり
●本書は各力士を集めて美艶なる寫真版數十枚を挿入して説明せし無二の良書なり

●相模四本柱 一部貳拾七錢 郵稅四錢
●本書は現時其の隆盛の極に達せる相模道の逸話を網羅せしものにして紙上東京大阪力士の面目躍々たり

●大阪朝日新聞評 本書はよみて題號の如く我國角力の沿革より日本大關一覽表に至る迄十一類に分類して沿革。放實。作法。逸話等を編輯したる者にして譽の講談を添へたれば好角家に重寶がらるゝ書なり

●角力獨案内 一部貳拾錢 郵稅四錢
●秘傳 本書は其標題の如く角力四十八手を一々圖畫を挿入し加ふるに周到なる説明を附したれば一見して其秘奥を知るは蓋し本書を措て他にあらざるは購讀諸士の贊賞せらるゝ所なり

●將碁獨習 定價四拾錢 郵稅四錢
●遊技全書第一編伊藤宗着編輯

●寫真術獨習 實價貳拾錢 郵稅四錢
●遊技全書第二編玄鹿館著

212
319

新刊講談

●松林小圓女口演

●偵探銀行頭取謀殺事件

定價貳拾五錢

郵稅六錢

●洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

●式亭三馬口演

●俠高砂浦五郎

定價廿五錢

郵稅六錢

●洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

●中村圓光口演

●曲淵旗本騷動

定價廿五錢

郵稅六錢

●政談美本表紙口畫共極彩色木版摺

●式亭三馬口演

●吉田御殿鹿子振袖

定價貳拾五錢

郵稅六錢

●洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

●桃川實口演 ●今村次郎速記

●三十三間堂仇討

定價廿五錢

郵稅六錢

●洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

●式亭三馬口演

●豪龜屋忠兵衛

定價廿五錢

郵稅六錢

●洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

●桃川燕玉口演今村次郎速記

●鎗の權三

定價廿五錢

郵稅六錢

●洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

●式亭三馬口演

●名譽力士高見山大五郎

定價廿五錢

郵稅六錢

●洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

●松林小圓女口演

●俠泉の島吉

定價廿五錢

郵稅六錢

●客美本表紙口畫共極彩色木版摺

●式亭三馬口演

●大奥吉田御殿

定價廿五錢

郵稅六錢

●洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

●松林小圓女口演

●明治大賊まぼろし小僧

定價廿五錢

郵稅六錢

●洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

●式亭三馬口演

●梅川忠兵衛

定價廿五錢

郵稅六錢

●洋裝美本表紙口畫共極彩色木版摺

終



破世書行